

Urban Design Center Matsuyama

Annual Report 2017

松山アーバンデザインセンター年間報告書 2017



目次

1	4年目の活動を終えて	02
2	松山アーバンデザインセンターの概要	04
3	空間デザインマネジメント：「創る」	
3-1	花園町通り竣工 - 中心の外をつくる -	08
3-2	道後温泉活性化	11
3-3	銀天街L字地区再開発	20
3-4	JR 松山駅周辺市街地整備検討調査	25
3-5	郊外拠点地区のまちづくり（三津浜地区等）	26
3-6	夏のまちづくりワークショップ（移動する建築）	27
4	まちづくりの担い手育成：「学ぶ」	
4-1	アーバンデザインスクール	42
	① 松山アーバンデザインスクール	43
	② 東温アーバンデザインスクール	50
	③ 砥部アーバンデザインスクール	52
4-2	アーバンデザイン研究会	54
4-3	歴史文化まちづくり研究会	56
4-4	松山交通研究会	58
4-5	ラジオ音楽ドラマ「架空のまち」制作	59
5	賑わいの創出：「交わる」	
5-1	みんなのひろば・もぶるテラスの運営	64
6	情報発信：「知る」	
6-1	まちなかマガジン「もぶる」	72
6-2	FM 愛媛「まちラヂ」	74
6-3	松山アーバンデザインセンターフォーラム	76
7	UDCM の事業改善及び重点課題について	80
8	おわりに	82

資料

UDCM運営体制	83
活動フィールド	84
受賞・論文一覧	85
活動一覧	86

1 4年目の活動を終えて

松山市都市再生協議会会長 矢田部 龍一

愛媛県の昨年の最大行事は、第72回国民体育大会と第17回全国障害者スポーツ大会の開催であった。国体の開会式には天皇皇后両陛下がご臨席された。そして、10月1日には天皇陛下が国の重要文化財に指定されている道後温泉本館を視察された。道後温泉本館は1894年に伊佐庭如矢が改築したものである。伊佐庭は道後湯之町の初代町長であり、小学校教員の初任給が8円といわれた時代に総工費13万5千円をかけた大改築工事を成し遂げた人物である。膨大な改築予算に町財政が傾くとの非難の嵐の中、自らを無給として、誠心誠意をもって町民を説得した。また、伊佐庭は観光客誘致のために鉄道も走らせ、道後温泉隆盛の基礎を築いた。このように、伊佐庭と道後湯之町の町民の努力があって、天皇皇后両陛下がご来県された折に、ご視察先として道後温泉本館が活用されている。もし道後温泉本館が建築されていなければ、天皇陛下に何をお見せしたのであろうか。先人たちの努力に頭が下がる。

昨年7月、日田市は豪雨に見舞われ、JR九州の橋梁の流出や大規模な山腹崩壊などの被害が発生した。豪雨災害調査の折に、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている日田市豆田町を訪ねてみた。豆田町は、江戸時代に幕府直轄の天領地として栄えた城下町で、九州の小京都と言われている。天領であった当時の街並みがほぼそのまま残されており、風情ある町の佇まいに心が癒される。訪れた際には、天領日田おひなまつりが開催されており、多くの外国人団体客などで賑わっていた。

道後温泉本館といい、日田市豆田町といい、日本人の古き良き感性を感じさせられる風情がある。経済的に見れば、歴史上、類を見ない繁栄を誇っている今日、私たちは、どのような街並みを、そして建造物群を次の世代に引き継いでいくのであろうか。100年後の人たちが誇りに思ってくれるような美しい街並みを作り上げているのであろうか。はなはだ疑問に感じざるを得ない。

道後温泉本館は松山観光のシンボルであり、また豆田の

重要伝統的建造物群保存地区は日田観光のシンボリック的存在である。これらのシンボルがあるがゆえに多くの観光客が訪れてきてくれている。そういう意味では過去の遺産の上に、現在の人々が胡坐をかいているのかもしれない。もし胡坐をかくだけで、次の世代に何も残さないとすれば泥棒ともいえる。

今日の日本は、経済的に最も栄えた時代である。これほどの繁栄は、先にも後にもないかもしれない。繁栄した時代を生きる私たちは、少なくとも泥棒になってはいけない。

UDCM設置後、4年が経過した。この間、松山の中心市街地の活性化等に取り組んで多くの成果を挙げつつある。松山市のキャッチフレーズである「いで湯と城と文学のまち」、「一人でも多くの人を笑顔に 幸せ実感都市 まつやま」が実るまちづくりの一翼を担いたい。そして、いつの日かJR松山駅前から堀端、花園を抜けて市駅前、銀天街、大街道、ロープウェイ街を通って道後に至る道が、歩行者にとって歴史と文化と美を満喫でき、後世の人が誇りに思えるような通りになることを願う。

松山アーバンデザインセンターセンター長 羽藤 英二

花園町通りと道後温泉飛鳥乃湯泉が昨年竣工した。花園町通りは、市駅と堀の内をつなぐ松山の伝統ある通りであり、道後温泉飛鳥乃湯泉は、町の湯である椿の湯の裏手を改修したものだ。市駅や道後温泉本館と比すると、派手ではないが、二つの事業は、どちらも既存の社会基盤を生かした設計という点で、今後の松山市の都市政策において小さくない意味を持つのではないだろうか。

花園町通りは、既存の6車線道路を2車線にして、歩行者のための空間として更新したものである。一方の道後温泉飛鳥乃湯泉は、椿の湯の敷地を一部活用して、道後のまちに新たな広場空間を生み出したものだ。1980年代以降、他の地方都市と同じように郊外への拠点移動が続き、結果として車中心の生活を支えるために、多くの社会基盤整備が行われたものの、松山市の人口は減少局面に突入している。こうした中、車のための道路空間を、社会的な空間へ更新することを目指し、都市の中に、あえて固有の機能を持たない人々のさまざまな活動を包摂する広場や街路をつくることを試みている。

できた街路と広場でいったい何をするのか。災害に対する都市の備えとしてこうした余白となる公共空間が機能することはもちろんだけれど、その設計段階から、地元の子供たちや市民の皆さんが、道路づくりや広場づくりに参加した点も、従前の社会基盤整備事業としては考えられなかった方法論がとられたといっている。まちの中にできる新たな公共空間の使い手と担い手に子供たちを想定し、参加型の基盤整備が推進された。

全国的に人口減少に歯止めがかからないということだが、数字で言えば、毎年50万人ほどの人々がこの国から居なくなっていることになるらしい。松山市くらいの都市がなくなっているということだから、たいへんなことだ。人口減少を克服した先進国としてフランスが知られている。19世紀から英国やドイツに対して人口減少に悩まされていたフランスは、長期的に少子化対策制度を整えてい

くことを選択する。家族給付手当制度を30種類も構築し、柔軟な育児親休業、保育所への援助、母親就業や紺外子婚の支援制度の整備を実行に移したのだ。

フランスはこうした基盤整備によって少子化問題を克服したわけだが、もうひとつ世界に誇れる制度がある。「交通権」である。フランスは、ミッテラン政権下で、1982年に交通基本法を制定し、人が移動するための環境整備を社会権として認める「交通権」と「地域交通計画」の立案を義務付けたのだ。この法律によって、フランスは、コミュンと呼ばれる小さな規模の自治組織を基本に、移動しやすい都市空間にむけて、中心市街地を人間中心の歩行空間の整備に踏み切っていく。少子高齢化と質の高い都市基盤整備が、フランスの社会政策の両輪といっている。

昨年、松山市で竣工した二つの空間整備も、このような時代の要請を全国に先駆けて先取りしたものといっている。その空間設計とデザインマネジメントにあたって、内藤廣氏をはじめとする日本を代表する多くの建築家や設計者が、地元設計者と建設事業者の皆さんと共に、行政担当者やUDCMのメンバーと一緒に長い時間をかけて、市民の皆さんと取り組んでいただいた。ここに感謝を示したい。

2 松山アーバンデザインセンターの概要

松山アーバンデザインセンター（UDCM）は、松山市が持続可能で活力あるまちとして発展するために、まち全体をマネジメントする拠点として設立された。現在は将来の担い手育成の場としても活用されている。また、松山市の中心市街地には公園や緑地、滞留空間が不足していることから、松山の「賑わい再生拠点」となる「みんなのひろば」と「もぶるテラス」を開設した。

UDCM設立してから4年が経過した現在、同施設に対する市民や住民、商店街の方々の認知度向上し、UDCMの活動にも理解と協力を得られることが多くなった。ここで、UDCMが担っている4つの役割ごとに、この一年間を振り返ってみたい。

まず、空間デザインマネジメント：「創る」である。「道後温泉別館飛鳥乃湯泉」の新築工事や周辺道路の景観整備にあわせて、浅子佳英ディレクターにより「椿通り景観整備基本構想」を策定し、沿道の建物の「ファサード整備」に取り組んでいる。多様な人が訪れる「飛鳥乃湯泉」・「椿の湯」のメイン通りとして、建物所有者や地元組織と連携しながら官民が一体となって景観整備に努めている。銀天街L字地区の再開発については、地元・使い手・民間・行政など様々な関係者が参画し、協働でまちづくりを推進する「街なか再生サポーター会議」が設置され、UDCMは使い手として参画するとともに、運営の一翼を担ってきた。平成29年3月25日に第1回目が開催され、以後毎

月1回、全7回の開催を通じて、銀天街L字地区の都市再生について検討・提案を行った。

次に、まちづくりの担い手育成：「学ぶ」である。将来のまちづくりの担い手を育成するとともに、まちなかのファンを増やすことを目的として、平成26年11月に開設した「アーバンデザインスクール」は、今年3期目を迎えた。今年は、愛媛大学の羽鳥剛史准教授、尾崎信講師、片岡由香助教、松山大学の河内俊樹准教授、聖カタリナ大学の齋藤拓真助教、松山東雲女子大学の直井玲子講師の指導のもと、28名が6つのグループに分かれてプロジェクトの企画・実践に取り組んだ。また、東温市では6名、砥部町では8名のスクール生が地域資源を活用した活動に取り組んだ。

次に、賑わいの創出：「交わる」である。「みんなのひろば」が整備されてから、延べ利用者は約17万人、「もぶるテラス」の延べ利用者は、7万3千人を超える実績となっている。以前はコインパーキングだった「みんなのひろば」は、市民の憩いの場所としてリニューアルされた。午前中は幼稚園児の集団が芝生の山を駆け上がり土管の中で遊び、昼休みになるとOLが集まってお弁当やおやつをひろげている。また、近所の子育て世代や高齢者の憩いの場となっているとともに、夕方からは女子学生の交流の場となるなど多様な世代の方々に来ていただいている。これらの施設で、新居田真美ディレクターが「お城下マルシェ」や



みんなのひろば 土曜夜市



もぶるテラス

「レゴであそんで、まちづくり」、「週末はまちなかで子育てをまなぶ」など多彩なイベントを実施し、まちなかの賑わい創出につなげている。こうした取り組みが評価され、中心市街地賑わい再生社会実験「みんなのひろば」が、ソトノバ（一般社団法人パブリック・プレイス・パートナーズ）主催の「ソトノバ・アワード2017」で準大賞を受賞した。

次に、情報発信：「知る」である。市民の編集ワークショップから生まれたフリーペーパー「まちなかマガジンもぶる」は、年4回の発行で、発行部数も第1号の2,000部から徐々に増刷され、本年3月に発行された第7号は10,000部と大幅に増やしている。また、FM愛媛の協力で運営するラジオ番組「まち@ラジ」（毎週水曜11:40～11:55放送）は、アナウンス部のメンバーを中心に市民が企画、取材、収録に携わっている。今後も引き続き、まちづくりに関する情報が一元的に集まり、魅力的でわかりやすくなるよう、ホームページを充実させるとともに、さまざまな媒体を活用してUDCMの活動を積極的に発信し認知度の向上を図りたい。

最後に、本年度はこれまでのUDCMにはなかった取組みが2つあるので紹介したい。

一つは、「移動する建築」プロジェクトである。道路や広場等の公共施設の整備は地方自治体によってなされるが、整備後は市民の自由使用にゆだねられており、一般的

には地域の活性化につながっていない場合も少なくない。そこで、UDCMでは新たに出現した「花園町通り」と「道後飛鳥乃湯泉」の広場的な空間の賑わい創出とまちづくりの担い手育成のために、地元の小学生や地域の人たちとのワークショップを経て、「移動する建築」を完成させた。この「移動する建築」は地域のまちづくりの拠点となるもので、地域の人が愛着と誇りを持ってさまざまな活動に使っていただければと期待している。

二つ目は、民間団体からの協力依頼である。道後温泉駅前にある「道後温泉観光会館」の整備に伴い、建物所有者である「道後温泉旅館協同組合」から「道後温泉観光会館再生整備検討委員会」の委員就任依頼があり、再生整備構想の検討を支援した。また、野志市長が出席するタウンミーティングの場で、「萱町商店街の活性化について」地元役員からUDCMに対して協力の要請があったことから、アーバンデザインスクールで取りあげ活動した。その他、民間建物のデザイン検討や町内会のまちづくり活動の相談があるなど、UDCMがまちづくり組織として認知されてきたことがうかがえる一年であった。

今後も引き続き、公・民・学をつなぐ現地の「まちづくりの拠点」として本市の活性化に向けてチャレンジしていきたい。



移動する建築（左：花園町通り、右：道後飛鳥乃湯泉）





3 空間デザインマネジメント：「創る」

「市民ひとりひとりが主役の舞台づくり」

日本最古の温泉地である道後やにぎわいの玄関口である一番町大街道口などの空間デザインを提案するなど、地元の方々や行政の関係者と連携しながら、地域再生のために魅力的な都市空間デザインの実現に向けて取り組んでいます。



3-1 花園町通りの竣工 - 中心の外をつくる -

1. はじめに

どんな専門家も、まちの拠点や中心をつくりたがるが、中心をつくる計画の殆どは失敗する。中心の外との間の「流れ」の釣り合いを設計することが難しいからだ。建築の構造計算をする職能はあっても、密度と配置で決まる都市の水平方向の力（流れ）の向きと量をちゃんと設計できる職能はいまだ確立しているとは言いがたい。松山市は陸上競技場や市民プール、動物園を90年代頃から郊外に移転させている。これらの施設は、ひとつひとつをとれば、どれもまちなかの中心施設ではなかったが、田圃ばかりだった郊外への移転が（相次いだことで）松山市およびその近郊の施設配置と中心をめぐる「流れ」の釣り合いを少しずつ変えていった。

当時、競輪場の移転は市民から歓迎されたし、まちなかの子供向けの施設の郊外移転も車社会を考えればそれほど反対はなかった。いずれの施設も都市に欠かざる中心そのものとは考えられていなかったこともあっただろう。結果として、堀之内は静穏になったし、家族連れにしてみれば、郊外に施設が移転したことで、クルマで訪れやすくなった。

56号バイパスなどの放射道路と環状線が整備され、沿道商業施設の密度は高くなる。一方まちなかでは、市営プールや子供の城が移転したことで、（町の中心のひとつとして認識されている）市駅から歩いて友達とプールに通った花園町通りから子供たちの姿はなくなった。銀天街から大街道商店街近傍の空地になった土地は手っ取り早い収益確保のための駐車場に姿を変えた。市駅や城山といったまちの中心そのものは変わらなかったが、まちの中心の外の活動は駐車場と店舗を往復するだけの空間へ転化し、滞在時間は短くなり、アクティビティチェーンは単純化した。（都市に詳しいという専門家によって）大規模小売店舗立地法は改正され、市境の向こうに大型ショッピングセンターが出来た。ネットによる小売の集積はさ

らに巨大だ。情報によって行動は粒子化し、地理的文脈を継承してきた空間は解体されつつある。

都市の中心とは何か？中心とは様々な流動の釣り合いを取る焦点のようなものではないか。むしろ中心と中心から外れた場所との間に生じている交通パターンの性質に注意を払うべきではないか。建築と建築の間を人は行き交う。間を行き交うことで有機的な感覚や、呼応するさまざまなまちの機能と他者の介在がうまれる。中心からすこし外れた場所に丁寧に目を向ける。アスファルトをひっぺがしてみる。木を植えて緑陰をつくれば、小さな人だまりがうまれるだろう。近隣の感覚のある道路が連鎖して、静かな奥へつながっていく。まちのバランスを取り戻すために、中心とその外を結ぶ通りや、小さな広場を少しずつくっていく。中心の外をつくる。そういうイメージが頭に浮かんだ。

2. クルマの通らない道路は可能か

私たちは、07年頃から市の総合交通戦略をつくりはじめた。配分計算と人口シナリオ作成を繰返し行い、中心の近傍にまとまりのある多様な交通パターンを再生するために、まちなかに住む人を少しずつ増やしていくこと、地域それぞれの中心とその外との間に、候補となるいくつかの敷地と道路を抽出した。

花園町通りはそのなかのひとつで、松山の中心といえる市駅の駅前から松山城下の堀の内を結ぶ幅員37m延長約400m、中央には路面電車が走る6車線道路だった。計画にあたって、まず第一に、車のためにつくられた道路を遅い交通のための空間にすること、第二に、単なる道路整備ではなく、各種の催しに適應できるような空間にすること、これらが私たちの計画の出発点となった。

花園町通りの東側には古くから軒を連ねていた商店が空き店舗化しおり、西側は街区が大きくマンションや専門学校など複数が統合されて再開発された建物が目立って

いた。店舗の新陳代謝がなかなか進まないまま高齢化が進展し、自動車交通量は30年前に比べて半減するなど減少の一途をたどっていた。交通量が減り役割を果たすことのなくなった広幅員道路の問題は、それほど明確に認識されていないように見えた。私たちは、交通量調査とシミュレーションに基づいて、道路を6車線から2車線にすることを決断した。

幸い私たちは、小さなものではあったけれど、ロープウェイ通りなどで、道路空間の再配分によるものを試みて、断面改良による交通制御や、地域の人々が参加しながら車の速度を落とすような道路づくりを進めていく—これは不幸なことだと云わなければならないが一軌轢のなかで全体としてうまく進めてゆくことを経験していたので、思い切った道路空間の再配分の試みにふんざることができた。

私たちは、市長をリーダーとする「まちづくり懇談会」を設置し、都市マスタープラン、総合交通戦略などの議論を行いつつ、花園町通りのリノベーションはその中の重点整備プロジェクトとして位置づけられることになった。2012年4月からは、月1回のペースで花園町通りの空間改変事業懇談会を開き、市、警察、専門家、商店街役員、交通事業者、市駅前役員の間で使い方に関する決定協議が行われた。さらに地元住民を中心としたワークショップを月1回のペースで並行して開催することにした。



3. フレキシブルな道路へ

社会実験に多くの住民に参加してもらうため、昼と夜の2部制で、顔を付き合わせて議論をはじめたが、私たちの提案に対して、反対意見が相次いだ。とにかく住民の利用ニーズに一致しなかった。確かに、歳をとった人であれば、車で玄関から送り迎えしてほしいだろうし、庭のように使っていた街路をいきなり公共空間だと言われても、専門家の考える街路の新たな使い方は、地元の人たちには理解し難いように見えた。歩道を拡張してデッキや芝生を設えることで食事や佇みといった滞留や、イベントの場として活用するデッキを配置した提案を行っていたが、気付かないうちに活動内容や使い方をこちらが限定して押し付けていたのかもしれない。私たちは、思い切って一旦道路断面を全面フラット化する提案へとプラン変更することにした。

路面電車から軒先の歩道まで一気通貫するフラットな道路で境界をなくし、車の交通機能を保持したまま、（よくいえば）市民が望むさまざまな使い方へ対応可能な（悪く言えば）いささかルーズな設計提案に切り替え、2012年7月の整備検討WSで議論を行った。反対する声はそれでもまだ多かったが、市民の目の色が変わったのがわかった。そこからは、一軒一軒（ドブ板で）説明に回って歩き、合意の取れたところから沿道建築と一体となった活動プログラムを検討し、対応できる道路空間へと細かな設



計変更を繰り返した。

南堀端に抜ける交差点の交通シミュレーションで道路混雑が起きないことを確認できていたこと、空間再配分に対して積極的な沿道に住む若い世代に主体的に社会実験に参加してもらったことも大きかった。正岡子規の生家前に庭のような空間を設けたり、駐輪場は違法駐輪が出ないように、分散型にして再配置した上で、裏に設置した新たな駐輪施設を用意するといった面的な交通空間の設計も新たな提案として取り込まれることとなった。

社会実験を行ったことで、屋台の営業時間にはNoが突きつけられていたが、路上では子供たちが勝手にキャッチボールを始めていた。道路がフラットであるほど、利用方法はフレキシブルになる。同じような活動を望むのではなく、自分たちで道路の使い方をどんどん提案し変えていくような活動が起ること、そのために「私」と「公」が混在するような道路の実現に期待したい。

計画から設計・建設を手伝ってくれた設計領域、復建調査設計、南雲氏、野原氏、片岡氏、小野氏、地元の建設会社諸氏、現場の指揮をとってくれた福本氏、石井氏、白石氏、林氏、大政氏以下の課員の方々には特に感謝したい。彼らの経験と熱意は、工事を進捗させるのに充分優れたものであった。最後に、十分な寛容さをもって、この計画と建設を見守り、激しい反対が続く中、我慢強く激励してくれた松山市長 野志氏と地元商店会会長 富田氏の御厚情には、感謝に堪えないものがあった。

道路は、多くの人たちの相互信頼と協力によってできてゆくものである。無理解な協力者をもつことは不幸なことである。そのようなとき、相互の論議につかれ果てると、つい、協力者をだましだまし進めなければならないようなことがよくあるものである。また協力者のあいだに意思の疎通を欠くようなとき、議論が、つねに見事に開花するとは限らない。市民や計画者や設計者、施工者の間の議論も、敵、味方の関係におしやられる場合がままあるものであ

る。そこにはおのづからの分担と責任はあるのだが、相互信頼を欠いた敵、味方の関係からは、見事な結実を期待することはできない。多くの場合、こうしてつくられた道路を使用し、利用するものとの間の問題は、さらに複雑である。しかしそれによく耐えて、はじめて、中心のすこし外側で役割を喪っていた道路は再び生命をもつものとなる。

道路は、このような社会的な結実なのである。私たちがつくったこの道路は、尚まだ幾多の欠点を持っている。にもかかわらず、なにか、例えばあの日みたキャッチボールをしていたこどもたちにとって、この道路が新たな居場所となるに値するものとなったなら、それは、これら多くの方々の協力の賜物である。

3-2 道後温泉活性化

1. 都市の起源

「都市の起源は黒曜石である」

ジェーンジェイコブズは黒曜石を使って都市論を展開した。道後温泉の起源は、道後平野と傾斜地の際（きわ）の推定断層から自噴していた湯泉である。黒曜石と同様、天然資源である温泉の噴出が、道後を生み出した。温泉は、様々なものを引き寄せる。同行二人の札をかけたお遍路さんが歩く距離は一日に30km。日が落ちるまでに三津浜の大山寺札所まで足を伸ばすには遠かったため、道中休息をとるために遍路宿が自然した。源泉を抜けて大山寺に向かう動線上に、黒曜市が如く湯治場が自然していくこととなった。戦国期の村上水軍から江戸期の松平氏へ、温泉経営は本格化する。武士・僧侶向けの一の湯、一般男・女向けの二の湯と三の湯、遍路客向けの無銭湯である養生湯、馬が入る馬湯など様々な湯屋が、社会階層毎に配置され、遍路道沿いの湯之町はゆっくりと発展していく。明治期になって、鉄道網の取り込みによって道後は大きく発展した後、モータリゼーションの流れに乗り、大規模建築が源泉を取り込むことで、内湯化が進行する。町の魅力は徐々に小さくなり、入り込み客を減らしていた。

道後温泉の空間計画に関わるようになったのは、しまな

み街道の開業効果も一服し、道後の入り込み客数の減少に歯止めがきかないことが明らかになり始めていた頃だった。温泉地は団体ツアー客を相手にした業態からの転換を迫られていたものの、長年続いてきた本館湯屋の存在を基本とした求心性の高い観光地像に対して、新たな地域像を描きかねているように感じられた。

2. 中心動線を切り替える

最初に、私たちは道後温泉本館前道路（2007年竣工）の計画にかかわることになった。当時、町を中心といえる道後温泉本館前は、温泉に入りにくた宿泊客と、通過交通の車やタクシーがごちゃごちゃに溢れかえり、温泉町の情緒は喪われていた。私たちは、県道と市道の付け替えを行い、歩行者動線を主に、車動線を従とする中心動線の転換を図り、道路空間そのものを（広場のように）作り変えることを試みた。県道は2車線道路を確保し、町に流入していた通過交通を捌く機能を明確化した上で、付け替えた市道は歩行者向け道路空間として、舗装石と断面構成を見直し、その再生を図ることとした。道後温泉本館湯屋が出来た同時期、地元の職人が手鑿で削った瀬戸内産の桜御影が伊予鉄の敷石として残っていたので、桜御影石を基本素



歩行者と車の行動モデルを用いた動線解析

材として、本館湯屋の鍵型道路を歩行者空間として生まれ変わらせることを試みたのだ。かつて車の走っていた道路は、歩行者中心の鍵型道路として生まれ変わり、ゆったりと歩いたり、写真を撮ることができるようになった。現在、道路であるにも関わらず、広場的な様相を見せている。

次に、私たちは、本館に近い温泉町のゲートウェイにあたる道後温泉駅に面した放生園前道路を一方通行化することを考えた。車交通の動線を単純化することで生まれる道路空間の余白を歩行者に向けて開放しようとしたのだ。交通シミュレーションや歩行者の行動分析を行い、町への流入と、掃きだし口にあたる交差点の信号現示の調整を繰り返し協議した後、幹線道である国道に影響の出ない信号現示パターンを絞込み、地区内部の車動線の単純化と歩行者空間の拡大を目指した。

結果として、道後温泉駅前のバスターミナル近傍の道路空間を、トランジットモールのような公共交通志向な運用が現実的に可能となり、道後の中心とゲートウェイ近傍を歩きやすい歩行空間につくりかえることを実現した。このようにして、歩行者と車交通の混在解消が実現したことで、道後商店街から空き店舗がなくなるなど、回遊行動だけでなく店舗構成にも変化が起きていた。新たな公共空間となった道路近傍の店舗が、派手派手しいパチンコ屋の看板を自ら架け替えるなど、町並みに対する自律的な変化も顕れはじめていた。



3. もうひとつの人だまりをつくる

道後の中心である本館近傍で、遅い交通の再生を目指した道路計画に取り組んだ私たちは、その後大規模な温泉建築の構想・計画・設計に関わることになる。地元が中心となって考えていた第三の湯構想が契機となったものだ。当時、(複数の)歴史的温泉施設群の建設を地元は要望していた。道後において、湯屋は何度も作り変えられている。とはいえ、そう簡単にいくつもの第三の湯が着工できるわけではない。過去そうであったように、安易な外湯建設は失敗する可能性もあるだろう。場所はどこにするのか、規模の基準はどう考えるか、「飛鳥乃湯泉構想」という第三の湯建設に向けた動きが地元と行政の間で膠着状態に陥った頃、私たちは、構想づくりに関わるようになった。

私たちは、まず、道後の都市計画にまつわる古い資料を探し始めた。道後は昭和41年まで財産区で、独自の自治システムを有していたため、市役所にも十分な資料は残っていなかった。何度か議論しているうちに、第二の湯である椿の湯が整備されたとき、2階倉庫に昔の地図や、都市計画資料を放り込んでいたことがわかったことから、私たちは、椿の湯2階に保管されていた膨大な資料の解読から、温泉づくりをスタートさせることにした。

4. 伊佐庭如矢の都市計画

江戸から明治における道後の転換は、伊佐庭如矢によっ



て先導されたことを示す何枚もの一次資料が発見された。遍路道沿いに形成された道後の基本構造を大きく転換させた伊佐庭の大改造計画は、その後、1944年に道後が松山市に編入され、1966年に道後財産区が廃止されるまで、都市の基本構造として維持されたといっている。

道後の町は、先に述べたように、遍路道沿いに立地した旅館群を中心になっていたが、1890年初代道後湯之町長に伊佐庭如矢が町長に就任したことでその構造は一変する。1892年に養生湯、1894年に分割されていた湯屋を3階建ての建築で統合した神の湯、1899年に天皇陛下に向けた霊の湯・又新殿の整備を矢継ぎ早に行い、江戸期から受け継がれてきた温泉施設を大きく更新した。さらに伊佐庭は三津浜から温泉客の輸送を目的とする道後鉄道を地元資本をもとに1895年に開業させ、1911年に道後温泉駅が竣工、鉄道とつながった都市型温泉は当時まだ珍しく、多くの人でにぎわうことになった。

子規と漱石は、1895年から1896年という短い期間を松山で過ごした。市内から出来たばかりの路面電車で道後を訪れたことが、1906年に漱石が新聞小説として連載した「坊ちゃん」にも描かれている。明治から大正に向かう自由な空気感の中で道後の町は鉄道によって大きく発展していった。

その後1927年の市内電車複線化と本館南側の大衆向けの鷺の湯整備によって、入浴客数はさらに増え、1935年

の土地利用図からは、大山寺に向けた従前の遍路道沿いの都市軸に対して、温泉駅に向けた駅前商店街が形成されていることが伺える。道後温泉本館は玄関棟を移築し、江戸期から続いた3棟を1棟に結合し、入浴客増加へ対応した上で、壮麗な外観に整備された。

色里や十歩はなれて秋の風(子規)

湯屋建築そのものが(鉄道整備とマッチングしたことで)観光地化した反面、町の湯としての機能も着実に根付いていた。道後に特有の斜面地形に沿った遍路道を少し歩いて、色町を抜ければ一遍上人ゆかり宝厳寺や、常信寺が美しい風景の中に展開され、面的な回遊性と広がりを持った多様な表情を見せる温泉町が形成されていくこととなった。

5. 戦後“共有地の悲劇”

戦争が終わると、源泉開発が本格化する。1955年6-10号源泉開発によって、本館北側道路沿いに内湯を持つ大規模ホテルが立地する。1935年に一旅館あたりの客室数は7部屋だったものが1971年には平均17部屋に、2013年には46部屋に大規模化が徐々に進化した。契機は内湯化だった。その結果、1948年に道後公園内に新温泉が開設し、大衆浴場が整備されたものの1979年には廃止される。また、観光バスで乗り入れ可能な本館北側道路沿いに大規模なホテルは立地し、比して遍路道沿いの規模



の小さな旅館の経営が徐々に圧迫されることとなった。

1957年の売春禁止法によって、上人坂の土地利用もスナック街へ変化し、遍路道に近い色町は徐々に消滅していく。土木技術を駆使した広幅員道路の開通と源泉開発による内湯と旅館の大規模化立地が町の構造を大きく転換させていった。1971年の旅館数126軒をピークに、旅館数は減少し、2013年には僅か33軒となっている。

個々の商いの形を時代に応じて変えていくことは、店主自身の合理的判断に基づくものであったが、結果として遍路道と上人坂の土地利用は空白化し、温泉旅館は内湯化と駐車場によって大規模化することとなる。新たなホテル群は、町から閉じた建築を基本構造としたことで、道後の回遊空間はその姿を大きく変える。内湯化は時代が求めた必然であったし、個々の商いの判断は合理的であった。しかし都市全体として見てみれば近接性の高い小規模経営ゆえに大切にされてきた共助の規範も喪われつつあった。共有地の悲劇といってよからう。

白地図の前にたったとき、閉じられた町になりつつある道後で、つくるべき計画は、もう一度外湯文化の再生を目指すものであるべきだと感じた。地元では、規模を大きく、車の駐車場も十分に取れる場所に新たな第三の湯の建設を望む声が大きかった。しかし、今までの都市の文脈と切り離れた場所に、新たに建築を計画しても、その効果は今までと同じで、限られたものになるのではないかと。そもそ

も、地元が候補地と見込んだ場所は、本館湯屋と遍路道双方から離れており、過去の経験に照らしたとき、建築としてうまく作って成功したとしても（豪華な第三の湯を建設すれば、暫くは人が集まるかもしれないが）遅い交通の動線連鎖を持続的に生み出すことは難しいように思えた。議論が膠着状態に陥る中、東日本大震災の発生によって、本館湯屋の耐震補強工事の声が高まり、工事中本館の代わりを務められる外湯を求める声が増しに大きくなった。一方、財政状況を考えると、建築費用を安く押さえることが求められていた。

6. 建築を動線から考える

建築費を安く抑えること、地域の文脈に沿った湯屋となることを条件に、もう一度候補地を考え直すことにした。見直し作業の中で、市民が第二の湯として利用していた椿の湯の敷地裏が、十分に活用できていない事実が浮かび上がった。椿の湯の敷地裏は、昭和期に上人坂から移転した赤線が営業を継続している風俗街に近く、道後に固有の斜面地と平野の際にちょうど位置していた。地元の反応は鈍かったが、遍路道に面しており、昔からの動線の文脈を継承できること、隣接敷地と組み合わせて使うことで新たな動線の形を生み出す可能性があると考えた。

私たちは、第二の湯である椿の湯の裏敷地を、改めて第三の湯の候補地として、提案を行うことを決断した。内藤



廣建築設計事務所に相談し、ラフな建築配置のボリュームスタディの作業に入った。椿の湯では、閉じた中庭として扱われていた空間を、新たな建築を古い建築に対して隣り合わせに、コの字型に配置してみた。すると遍路道に対して開かれた広場をつくることができることがわかった。この配置を採用すれば、歩行者空間が湯屋を中心に囲むような配置をとっている本館湯屋に対して、新しい湯屋が第二の湯と一体となり、図（建築）と地（道路）をひっくり返した空間構成をとることができる。さまざまな動線体験が期待できるのではないかと考えた。

道後の温泉建築の構造的個性のスタディのために、営業が終了した本館湯屋に私たちは夜遅く潜り込み、調査を行った。軒や手摺をはじめいたるところに湯玉や鷺といった温泉を顕す様々な意匠の手が加えられていた。また、明治期に建てられた木造建築と、昭和初期のRC構造の建物が増改築を繰り返し、複合的に全体構造として互いを支え合って長年にわたって成立していたことも明らかとなった。

江戸期より、武士・僧侶、男、女、無銭、馬の湯と異なる社会的階層の沐浴は、それぞれ別の小屋によって賄われてきた。明治の大改造期において、天皇陛下のための霊の湯・又新殿を加え、（少なくとも見た目上は）一体的な空間とした建築的展開に対して、沐浴における社会的階層の分化という慣習を、入口を分化させ、動線を建築の内外

で、三次元的に繋ぎ合わせ、いくつもの分岐を中に設けることで、聖俗の動線を成立させている。異なる時代の複合的な建築の接合によって生まれる動線の持つ質が、道後湯屋の建築空間が持つべき必須条件と考えた。

新しい湯屋に、フラットでどこからでもつながる動線と視線の交叉する場所を用意すること。新たな共有地を開き、さまざまな人が関与できる場所にするためにあらゆる手立てを尽くすこと。道後のような密度の高い空間では、共助こそが実は合理的な行動原理であることを知るための場所をもう一度作り出す必要があると感じた。とはいえ、地元からは、もっと規模が大きな湯屋をと、反対の声も大きく、会議は紛糾した。しかし古くからある第二の湯と新たな第三の湯が隣接させることで生まれる敷地の妙は、本館前から商店街を抜けて新たな湯屋に流れ込む動線にある。そしてその動線が交じり合い、街に向けてさまざまな方向へと流れ出すきっかけの場所となるよう敷地を見立てた。私たちは粘り強く説明を行い、ようやく実施設計が動き出した。

7. 地域文化の編集装置となること

内藤ひろし氏と相談し、地元の手による設計・建設が望ましいことから、地元の建築事務所である鳳設計に実施設計をお願いすることとなった。協議を繰り返し、1階には開放的な大浴場を配し、本館には無い露天風呂を設置する



と共に、2階には、第二の湯と第三の湯の建築が互いに向き合うことで、生み出される広場空間を見下ろすように大広間を設けた。皇室専用とされてきた又新殿を模した浴室を観光客向けの風呂とは別に2階に設置し、道後温泉ならではの「おもてなし」の給茶サービスを大広間で行うことで、建築の内と外に異なる空間体験の共有と、質の高い動線設計を考えた。

動線体験の質を高める上で、密度の高い意匠が重要と考えた。飛鳥時代から継承されてきたとされる道後の湯文化を表現するために、地元の工芸職人の方々に協力を仰ぎ、GK京都にお願いして、地元の手による職人の技を、湯屋空間に取り入れることを試みた。地元で和紙づくりを長年継承してきている五十崎和紙さんに、繊細な紙漉り和紙の製作を依頼し、何度か試作を繰り返した後に、入り口天井部から配置することとした。紙を糸状に漉る際、和紙の原料の楮を漉きこむ技法でつくられた紙漉り和紙は、楮の絡み具合によって、半透明に映りこむ光が作用し、様々な表情を見せるエントランスが出来上がった。

正面入り口には和釘を用いることを考えた。現代高炉で作った釘は二十年で錆びるが、和釘は、砂鉄を炭で還元し不純物の少ない純鉄を鍛造している。このため錆が中に侵食していくことが少ない。法隆寺や薬師寺の修復に際して宮大工棟梁西岡氏が、樹齢千年の檜には、千年持つ釘があると述べているように、千年以上強度を有することが法隆寺再建調査でも明らかになっていた。私たちは、松山で和釘鍛造の鍛冶を継承している白鷹興光氏に、和釘の作成をお願いして、新湯の入り口を飾る千年の素材として用いることにした。

一方、風呂内部は、青磁の砥部焼をタイル絵として用いることとした。他窯の磁器と比較して頑丈で重量感があることから、ひびや欠けが入りにくいため、長年にわたって風呂のタイル絵に用いるのに相応しいと判断した。後背の山地から産出されている良質の陶石を現材料に、江戸中期

より続く砥部焼は、地元市民から親しまれた生活の陶器である。山田ひろみ氏に、霊峰石鎚山と、しまなみをモチーフに、波の形のひとつ、ひとつ、山並みの遠景から近景までを何度も描いていただいた。湯屋の屋根には菊間瓦を用いた。瀬戸内気候は、小雨で温暖であることから、瓦の乾燥を早め、瀬戸内から各地への海運が容易にできることで、菊間町の五味土を現在料とする菊間瓦を発展させた。屋根に縦約85センチ、横75センチ、重さ80キロの菊間瓦の本体に金焼塗装で装飾した鴟尾を配することとした。伊佐庭如矢による明治の本館の振鷺閣の上には北の空に今まさに飛びたんとする鷺がいる。二つの湯屋を視線で結ぶために、私たちは、新しくつくる新湯屋の搭屋の上にもう1羽の鷺を配した。

8. 椿の湯周辺ファサード整備事業

平成29年9月に『道後温泉別館 飛鳥乃湯泉』が完成した後、同年12月に『椿の湯』の改修工事や中庭の整備、道路整備（電線類の地中化、舗装の高質化）が完成した。

治道建物の『ファサード整備』については、UDCMと道後温泉周辺ファサード整備協定運営委員会（以下ファサード委員会）と地元住民（椿通町内会自治会）が中心となり、平成27年から計6回の景観まちづくり勉強会（ワークショップ）を開催した。平成29年3月には、新たに「洒落・個性」をテーマとした『椿の湯周辺地区』を追加し、既存の『景観まちづくりデザインガイドライン』を改訂した。

今年度は、飛鳥乃湯泉と一体となったデザインになるように、ファサード委員会や地元関係者と合意形成を諮りながら、浅子佳英ディレクターにより「椿通り景観整備基本構想」を策定し、『ファサード整備』に取り組んでいる。

「椿通り景観整備基本構想」



基本構想の冊子



模型（左：S = 1/100、
右：S = 1/50）

9. 道後温泉本館改修に伴う渋滞緩和策

道後温泉本館改修に伴う本館周辺の通行制限時、特に観光期等においては、渋滞が悪化することが予想されるため、工事期間中の渋滞を緩和するためには、事前の周知活動や関係者調整など、早期から交通影響緩和策に取り組むことが必要である。また、交通渋滞の発生等により、風評被害や、来訪者の満足度の低下、地域の一般交通の通行阻害など、観光客や道後温泉地域に与える影響を考慮し、これらの影響を最小限にとどめるための各種施策が必要となる。

本館工事の影響対策として、新設道路や迂回路の整備等ハード対策は容易ではないことから、事前の周知・啓発活動はもちろん、官民が協働して、交通影響緩和策を実施していくことが必要であり、以下具体例を示す。

1) 時間帯の変更

■ 自動車の流入・流出時間の分散化・平準化

- ・午前のホテルや旅館宿泊客のチェックアウト、夕方ホテルや旅館へのチェックインなど、特定の時間帯に集中する交通を、回遊性の向上や滞留時

間を延ばすことで、分散化（平準化）させ、渋滞の抑制を図る。

（例）朝方観光プログラムの企画

堀之内等で下車、路面電車などを利用した
道後地区への移動

宿泊予約者へのチェックイン時間の情報提供
など

■ 道後公園北側交差点の信号現示変更

- ・工事期間中の通行制限による影響は、現状発生している道後公園北側交差点の渋滞と密接に関係していることから、交通処理能力の向上を図るため、信号現示の変更を行う。

（例）時間帯別、曜日別の信号現示の変更 など

2) 経路の変更

■ 事前周知・啓発活動

- ・道後温泉本館周辺の交通規制や駐車場情報、アクセス手段などについて、早い段階から、マスコミ等を通じた周知・啓発活動の充実を図る。

(例) 工事計画の具体的なスケジュールに併せた、
報道機関等を活用した周知活動
現地での早期からの看板設置 など

■ 車両一方通行の検討

- ・放生園前の一方通行路について、午前の混雑時間帯において、一方通行を逆向きにするなどにより、道後公園北側交差点に集中する交通の分散化等について検討する。
- また、県道六軒家石手線について、時間帯別の一方通行規制について検討を行う。

■ 宿泊客等への交通案内・誘導

- ・旅館等へのアクセス経路や比較的混雑の少ない時間帯などの情報提供・誘導を行う。

(例) 宿泊客等への案内チラシの配布 など

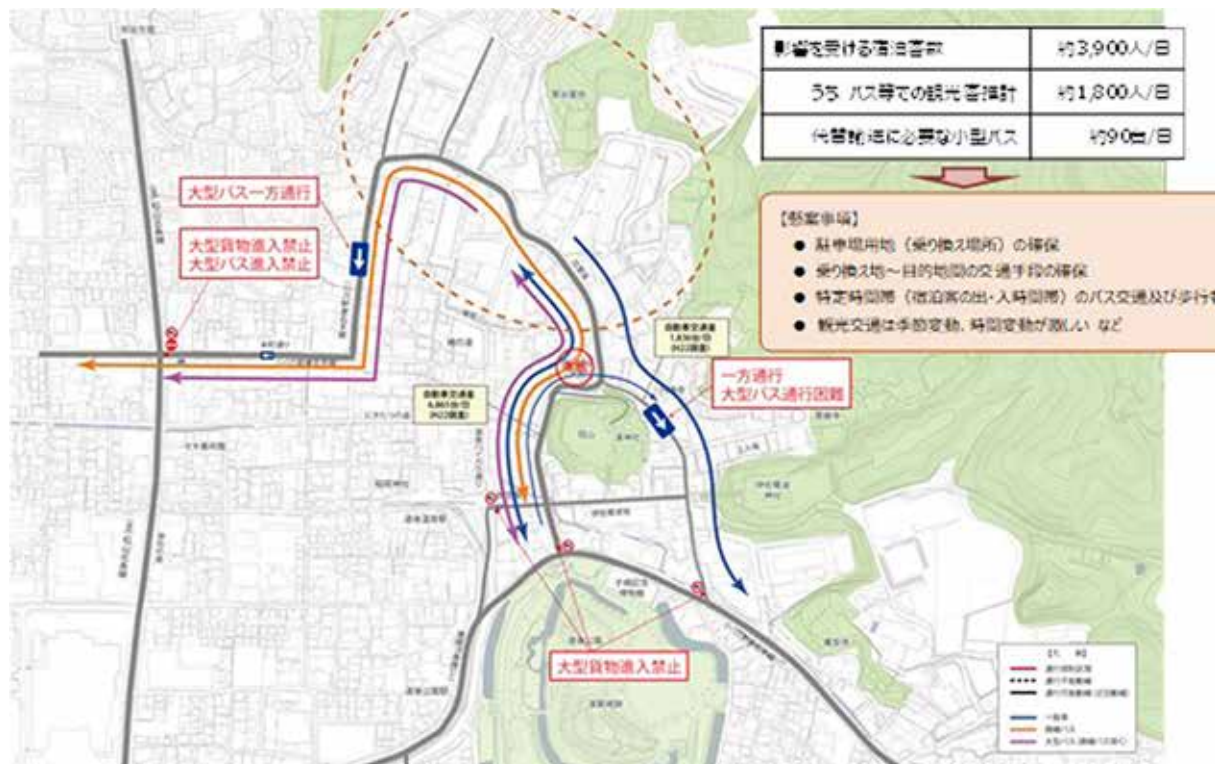
3) 手段の変更

■ 公共交通機関の利用促進

- ・公共交通によるアクセス方法等に関する情報提供の充実を図り、自家用車から公共交通への転換を促進する。

■ パーク&ライドの取り組み

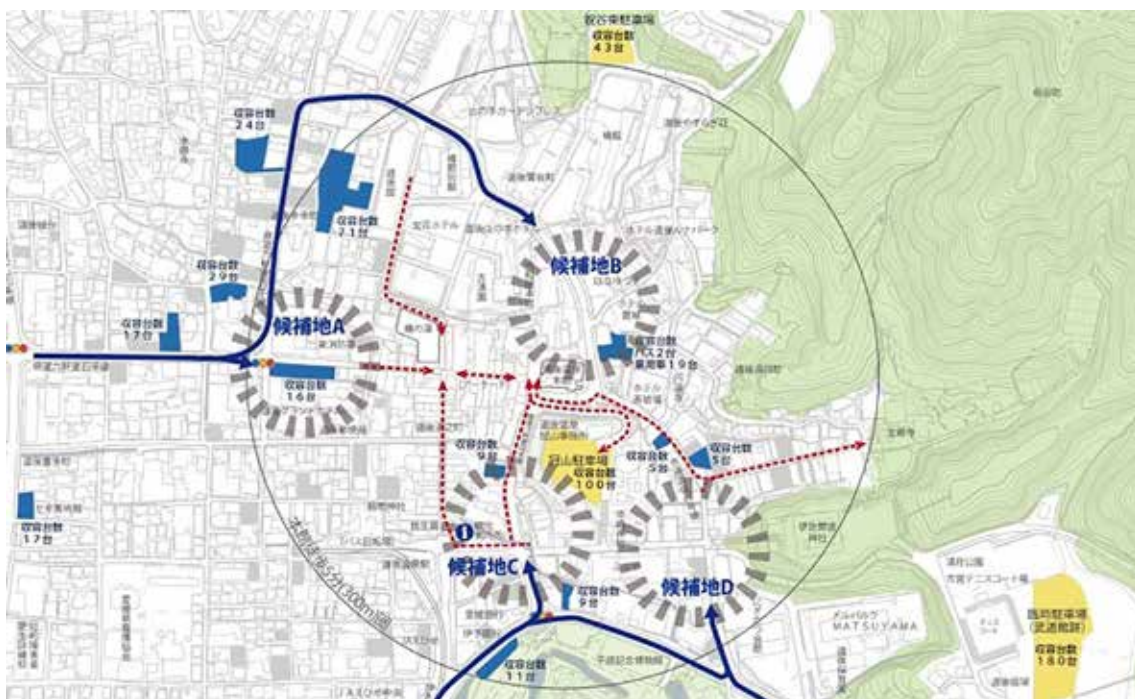
- ・道後温泉本館地区への観光客の車両進入を抑制するため、フリンジ部等に駐車場を配置し、パーク＆ライドを実施することが考えられる。駐車場用地の確保、駐車場から目的地までの移動手段の確保、観光バスや歩行者の特定時間・場所への集中による混雑発生などが懸念されるため、まちなかへの自家用車の駐車や公共交通によるアクセスなど、広域を含めたパーク＆ライドの取り組みについて検討を行う。



渋滞予測と懸案事項の抽出（道後温泉活性化基本計画より）

■ フリンジパーキングの検討

- ・道後温泉本館地区への車両進入の抑制を図るため、フリンジ部等への駐車場確保について検討を行う。



フリンジパーキングの検討（道後温泉活性化基本計画より）

3-3 銀天街 L 字地区再開発

銀天街 L 字地区の再開発について、UDCM は都市再生協議会のもとに設けられた「銀天街 L 字地区再開発検討専門部会」（平成 27 年 11 月発足）に委員として参加し、検討を行ってきた。専門部会では、平成 28 年度 12 月に最終答申として「銀天街 L 字地区再開発等基本計画」をまとめ、市が公表した。また、地元住民で組織する銀天街 L 字地区再開発全体協議会が平成 29 年 2 月に「全体構想」を策定している。

基本計画では、将来ビジョンとして「暮らしと賑わいの

共生 松山の新たな交流核」を掲げ、再開発の実施に向け、市民全体で交流核を考える仕組みづくりが提言された。

これを受け、地元・使い手・民間・行政など様々な関係者が参画し、協働でまちづくりを推進する「街なか再生サポーター会議」が設置され、UDCM は使い手として参画するとともに、運営の一翼を担ってきた。平成 29 年 3 月 25 日に第 1 回目が開催され、今年度は、6 回の開催を通じて、銀天街 L 字地区の都市再生について検討・提案を行った。以下その概要である。

1. 対象グループ

参加メンバー
使い手：社会人、学生、子育て世代
民間：まちづくり会社、ディベロッパー、地元企業
地元：商店街振興組合、地権者、再開発協議会
行政：松山市

2. 目的

- ・現在、官民連携で検討を進めている「銀天街 L 字地区」の都市再生について、「誰もが訪れたくなる魅力的な多世代交流の場」の実現に向け、多様な方々との意見交換を目的に設置する。
- ・立場の違う人と意見交換することで新たな「気づき」を生むとともに、全国の先進的な取り組みを学ぶことで、松山に必要な都市機能を考える機会を創出する。
- ・多様な方々からの「来たい」「住みたい」を集めることで、地区の都市再生に必要なコンテンツや仕組みを考える。
- ・最終的には、提案された様々なアイデアについて、模型等を使い「見える化」することで、今後の再開発等へ反映させる。

3. 開催概要

1) 第 2 回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017 年 5 月 30 日（金）19 時 00 分～21 時 30 分
開催場所	松山アーバンデザインセンター 1 階
参加者	32 名
プログラム	レクチャー「教育・子育て支援の場づくりのポイントと仕組み」 講師：古池 陽一 氏 / 株式会社ボーネルンド

東遊園地パークマネジメント協議会の小泉寛明氏を招き、「人が人を集める」というテーマで、神戸ファーマー

ズマーケットや灘高架下での取り組み事例、またアメリカ・ポートランドの街づくりの事例紹介いただいた。

その後、各班で「人が集まる居心地の良い空間」をテーマに、ソフト面・ハード面の両方に関する広場の使われ方について、グループワークを実施した。具体的には、「広場の使われ方」や「広場にあつたらいいと思う施設」について意見交換し、L字地区銀天街エリアのどの場所に広場を配置すべきか、といった検討を行った。各班で共通した意見としては、以下のようなものがあつた。

広場の使われ方では、マルシェ、休憩(ピクニック、花見など)、自然観察等。広場にあつたらいいと思う施設では、休憩スペース(椅子、ベンチなど)、緑、飲食店・カフェ、ライブ・イベントステージ等であつた。

2) 第3回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017年5月30日(金) 19時00分～21時30分
開催場所	松山アーバンデザインセンター1階
参加者	32名
プログラム	レクチャー「教育・子育て支援の場づくりのポイントと仕組み」 講師：古池 陽一 氏 / 株式会社ボーネルンド

(株)ボーネルンドの古池陽一氏を招き、「教育・子育て支援の場づくりのポイントと仕組み」というテーマで、子どもの遊び環境づくりの事例や、行政との協働による環境づくりの取り組み、「てんしば」プロジェクトの事例についてレクチャーをいただいた。その後、各班で「住みたい(暮らし・交流)街にするには、どんな施設・機能が必要か」をテーマに、銀天街にこういうものがあつたらいいな、または導入してほしい、と思う機能について、参加者が自分と異なる立場を設定し意見交換した。

3) 第4回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017年6月27日(火) 19時30分～21時30分
開催場所	松山アーバンデザインセンター1階
参加者	29名
プログラム	レクチャー「人と場をつなぐ新しいコミュニティづくり」 講師：中川 敬文 氏 / UDS 株式会社

UDS(株)の中川敬文氏を招き、「人と場をつなぐ新しいコミュニティづくり」というテーマでこれまで取り組んできた事業について、レクチャーしていただいた。その後、各班で「来たい街にするには、どんな施設・機能が必要か」をテーマに、銀天街にこういうものがあつたらいいな、または導入してほしいと思う機能について、意見交換をした。前回に引き続き、「参加者が自分と異なる立場を設定し、その立場になって意見交換する」、というロールプレイング式のグループワークを実践した。今回は、外から銀天街に訪れた人を想定し、意見交換した。

4) 第5回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017年7月21日(金) 19時00分～21時00分
開催場所	きらりん2階
参加者	27名
プログラム	レクチャー「関西大学梅田キャンパス KANDAI ME RISE の挑戦 ～産学連携で新たな知的拠点の創造と次代を担う人材育成の展開を目指す～」 講師：吉原 健二 / 関西大学梅田キャンパス

関西大学の吉原健二氏を招き、「関西大学梅田キャンパス KANDAI ME RISE の挑戦～産学連携で新たな知的拠点の創造と次代を担う人材育成の展開を目指す～」というテーマでレクチャーしていただいた。

グループワークでは、これまでに実施した意見交換を元に、「みなさんの関心事」で整理したものが、どのアイデアに当てはまるかのグルーピング作業を実施した。

5) 第6回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017年8月28日(月) 19時00分～21時00分
開催場所	松山アーバンデザインセンター 1階
参加者	20名
プログラム	意見交換

今回は、外部講師を招いて行うレクチャー形式ではなく、これまでのグループワークで出された意見の内容を、「(いつ)、(どこで)、(誰が)、(誰と)、(何をしている)」といった、より具体的なシーンを想像していただき、各グループでテーマとそれに基づくシーンにまとめた。

項目	内容
①関心事の選択	前回分類した関心事から興味・関心があるものを選択。そこに含まれる意見(モノ・機能)も併せて、「なぜそれが欲しいと思ったのか、それがあつて、そこがどんな場所で、どんな使われ方をするのか」を想像し、メモする。
②優先順位付け・集約化	各自が選択した関心事について、他の関心事で代替できるかどうかの検討、一緒にあってほしい関心事がある場合は追加で選択し、複合してみて、各班で3つの関心事(テーマ)に集約する。
③関心事の具体化	①②の作業によりテーマの集約化が済んだら、関心事に含まれる意見(モノ・機能)等も参考にして、どういった場所で誰がどんな風に過ごしているのかについて、具体的なシーンに落とし込む

6) 第7回街なか再生サポーター会議

開催日時	2017年9月26日(月) 19時00分～20時40分
開催場所	松山アーバンデザインセンター 1階
参加者	27名
プログラム	意見交換

これまでに各班で整理・作成したテーマとそれに基づくシーンをもとに、事務局で作成したイラストに対して参加者で意見交換を行い、各シーンに対する意見を発表した。

4. 銀店街L字地区に必要な都市機能

街なか再生サポーター会議における各班の意見を項目ごとに分類した結果、以下の6つの項目に整理することができた。

- ①チャレンジ系：新しいビジネスを生む場、会議・相談・レクチャー等の場
- ②広場・緑系：いろんな人（子連れのママ、OL、おじさん等）がいろんな過ごし方をしている場
- ③生活利便系：マルシェ、カフェ、フォットネス等、誰もが日常的に使用、参加できる場
- ④観光系：ゲストハウス、案内所、展望広場等、観光客と街の人が接点を持つ場
- ⑤アクティブ系：商店街外周の利用、商店街の中に建つビル等を利用して、アクティビティを楽しむ場
- ⑥路地系：路地裏で休む、文化を楽しむ等、アーケードの裏側を活用した場

5. イラスト化した「銀天街L字地区におけるシーン」の一例

<シーン①> 商店街にある公益施設又は大学キャンパスで新しいビジネスの予感



場所のイメージ：

商店街にあるビルの一室（比較的大きめの部屋）

活動のイメージ：

大学サテライトキャンパスで、学生が大画面を使ってスーツを着た人と会話中

サロンで、起業家同士がプレゼン、商談、会議をしている
キャリアセンターで、就活生が就職活動、お茶して一休み
しつつも学生同士の交流も

直販店で、農家の人が愛媛産の野菜等を販売する一方、新
ビジネス企画、農業を学ぶ

<シーン②>緑のある広場でさまざまな過ごし方



場所のイメージ：

みどりの広場、木陰、芝生、水辺

活動のイメージ：

おっちゃんが松山のおいしいものを観光客に自慢している

ママ友、夫婦が子どもを遊ばせながらおしゃべりしている

女子大生がスイーツを食べながら恋話をしている

OL、会社員が同僚と芝生、ベンチに座ってランチしている

まちなかの案内所で次の目的地を探している

仕事をリタイヤした女性が松山の街の紹介をしている



ワークショップの様子

3-4 JR 松山駅周辺市街地整備検討調査

連続立体交差事業および土地区画整理事業が予定されている松山駅およびその周辺エリアでは、継続的にその将来像のあり方を議論している。今年度は、松山市により、駅周辺の市街地のあり方を考えるための勉強会「松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会」が計5回開催された。本勉強会は、地権者、大学生、UDSMスクール生等で構成され、各回に講演会とワークショップを行う構成であった。地権者がみずからの商いだけでなく、エリア全体の価値を高める意識を持つような啓発的内容の講演と、駅周辺エリアの将来像を描くワークショップという二段階構成で、駅や駅前広場に先駆けて民間整備が予想される駅周辺エリアでの方向性を検討・共有していった。

UDCMでは、副センター長の小野およびディレクターの尾崎が、全体のプログラム構成や、講演内容・ゲストの提案、ワークショップのコーディネート等を通じてこ

の開催支援を行なった。9月11日に開催された第1回においては、尾崎が「街のデザインが、街の価値を高める」と題した講演を行なった。ここでは、ロープウェイ通りや他市町の連続立体交差事業の事例を紹介し、トータルに丁寧に街をデザインしていった事例においては、地価が上昇するなどの経済的なメリットが現れていること、逆に駅施設は丁寧にデザインされたとしても周辺街区の計画・デザインが連動していないとそのような効果は全く見られないことを解説した。一方で、このような経済効果は駅周辺の土地利用を持続させるための手段にすぎず、その土地利用を通じて「どんな場所にしたいか」という目的をよく議論し共有することが重要であることを呼びかけた。9月27日に開催された第2回以後は、小野と尾崎がワークショップのコーディネートを行い、目指すべき駅周辺エリアの方向性（ビジョンとコンセプト）について一定の成果を得た。



ワークショップの様子

3-5 三津浜地区景観まちづくり

郊外拠点地区である三津浜地区の景観まちづくりについての学習会は、今年度は平成 29 年 10 月（第 7 回）と平成 30 年 2 月（第 8 回）に開催された。地元のまちづくりグループである「松山西部地域開発協議会」「平成舟手組」「三津浜地区まちづくり協議会」「三津浜クリエイターズ」を中心に、ワークショップ形式で議論が進められ、成果が積み重ねられている。

第 7 回目は、「景観整備内容について、具体的に検討・確認しよう！」のテーマで、都市デザイン課より景観計画区域（案）の検討状況の報告を受け、参加者全員で緑地や道路の景観整備内容（案）の確認、並びに整備後の活用案について話し合った。第 8 回目は「景観整備の修正内容の確認と活用策について話し合おう！」のテーマで、修正内容の報告と、前回 WS での議論を踏まえた活用策を検討した。

平成 26 ～ 29 年度の 4 年にわたる学習会は、県外先進地域の視察なども実施し、住民のまちづくり意識の醸成や景観についての見識など、一定の成果を獲得してきた。今後は景観計画区域の策定へと進んでいく予定である。

三津浜地区におけるもうひとつの顕著な動きは、「松山市美しい街並みと賑わい創出事業」による古民家再生や景観整備である。今年度は三津の渡しに近い、木村家住宅（三津 1 丁目）の改修に助成が行われた。木村家住宅は、明治 14（1881）年上棟の本瓦葺き平入りの 2 階建て町家である。表口から奥へ抜ける通り庭に面して、店の間、中の間、座敷が続き、中庭を挟んで蔵が建ち、台所上部の高い火袋の吹き抜け空間は、排煙と採光を上手く確保した造りで、明治初期の面影をよく残している。

改修工事は平成 29 年 9 月から始まり、野の草設計室代表・橋詰飛香のコーディネートにボランティアも加わり、30 年春に完了した。3 月 17 日には保存再生を祝って「住み開き」のシンポジウム「地域に開かれた建築空間のあり方について考える」が開かれ、多くの人々で賑わった。ミ

ニ講演（講師：アサダワタル）、音楽演奏、そしてトークセッションでは古民家活用の担い手や資金確保の課題なども話し合われた。

木村家住宅の保存改修は、空き家再生の好例でもある。近隣には、同じように助成を受けて改修整備された鈴木家住宅、吉川製菓蔵、山本船具店が建ち並び、古民家や近代建築の古き良き姿がよみがえる。点が線となり、町の景観が着実に変化しつつあることが見て取れる。なによりも木村家の「住み開き」は、地区内外の多くの人々を招き入れ、コミュニティの再生、ネットワークの構築の兆しと映る。歴史あるまちの再生として、確かな歩みと言えよう。

3-6 夏のまちづくりワークショップ 「移動する建築」・「みんなのヒミツ基地」

2017年の秋から冬にかけて、花園町通りでは広場的な歩道空間が、道後温泉別館・飛鳥乃湯泉では中庭と街路の一体的な空間が誕生することとなった。これらの施設の計画・設計監理を支援してきたUDCMでは、新たに生まれる広場的空間の賑わいづくりと、まちづくりの対話促進を図るため、「移動する建築」都市設計コンペと「みんなの

ヒミツ基地」まちづくりアイデア募集を開催し、さまざまな関係者の力を総結集して動くまちづくり拠点を考案、製作し、実際に現地で運営を行うことを目指した。この一連の取り組みを、「夏のまちづくりワークショップ」と呼ぶ。

(1) 「移動する建築」都市設計コンペ

「移動する建築」は、幅広い世代が心地よく集い、賑わいを生み出し、地域の新たな魅力を引き出すような、動くまちづくり拠点である。入賞者2組は、デザイナーの南雲勝志氏の監修の下、道後温泉別館・飛鳥乃湯泉中庭と花園町通り歩道に設置する2つの「移動する建築」をデザインし、地元ワークショップに参加して地域の意見を聞いた上で、最終的なデザインを決定し、実施製作する。

全国から21件の応募があり、10月7日に行われた第一次審査において6件に絞り込まれた。10月29日の第二次審査は公開で行われ、それぞれのプレゼンテーションに会場は沸き、審査は難航した。結果として、花園町通りではキム・テボンの「まちを旅する4つの屋台」が、道後ではバンバタカユキと田中良典の「街の中の雲」が最優秀賞に選ばれた。また、当日審査会に参加できなかった特別審査員の内藤廣氏による「内藤賞」には「街の中の雲」が選ばれた。一方、会場からの投票では、学生5名がその場で茶室を組み上げるパフォーマンスを見せた松山工業高校建築学科の建築デザイン部による「どこでも茶室」がもっとも人気があり、これを市民賞として表彰した。

移動する建築

動くまちづくり拠点



DOGO

都市設計コンペ

テーマ「移動する建築」

道後温泉別館・飛鳥乃湯泉中庭と花園町通り歩道に設置する2つの「移動する建築」をデザインし、地元ワークショップに参加して地域の意見を聞いた上で、最終的なデザインを決定し、実施製作する。

応募締切 10月1日(日)

審査員 羽藤 英二 (都市工学者 | 東京大学)

特別審査員 内藤 廣 (建築家)

審査員 南雲 勝志 (デザイナー)

五十嵐 太郎 (建築評論家 | 東北大学)ほか

スケジュール

- 都市設計コンペ (2017年9月10日)
- 一次審査: 10月29日
- 二次審査: 10月29日
- デザインワークショップ (11月)
- 最終審査: 12月
- 制作ワークショップ (12月)
- 制作発表会 (12月)
- 制作発表会 (12月)

応募要項 「移動する建築」都市設計コンペ

応募内容

「移動する建築」を設計していくのに必要ないデザイナーを2名募集します。人々とともに、地域の新たな魅力を引き出すような、動くまちづくり拠点を考案、製作し、実際に現地で運営を行うことを目指した。この一連の取り組みを、「夏のまちづくりワークショップ」と呼ぶ。

応募締切

10月1日(日)必着

応募資格

1. 応募時点で20歳以上の個人またはグループ
2. グループの場合は、メンバー全員が条件を満たすこと。
3. デザインワークショップと製作ワークショップを含む、「移動する建築」の制作プロセスに参加できること。

提出物

審査要項・飛鳥乃湯泉・飛鳥乃湯泉中庭と花園町通り歩道に設置する2つの「移動する建築」をデザインし、地元ワークショップに参加して地域の意見を聞いた上で、最終的なデザインを決定し、実施製作する。

審査

1. 応募要項
2. プレゼンテーション
3. デザインワークショップ
4. 制作ワークショップ

賞

デザイン賞: 2点
賞金: 5万円、ワークショップへの参加費

提出先・お問合せ先

【提出先】
松山アーバンデザインセンター(UDCM)まで郵送により提出してください。
〒790-0012 愛媛県松山市南3丁5番地12

【お問合せ先】
UDCMに、応募したいメールにてお問い合わせください。【TEL】(公) 089-908-2901 E-mail: udcmmatsuyama@gmail.com

「移動する建築」都市設計コンペのチラシ

審査員長：羽藤英二（都市工学者 東京大学 / 松山アーバンデザインセンターセンター長）

審査員：川口学（松山市都市整備部長）

南雲勝志（デザイナー）

五十嵐太郎（建築評論家 東北大学）

寺尾保仁（(公社)愛媛県建築士会長）

新山富左衛門（道後温泉コンソーシアム代表者）

泉谷昇（花園まちづくりプロジェクト協議会理事長）

松波雄大（道後オンセナート 2014・道後アート 2015 / 2016 地元統括責任者）

特別審査員：内藤廣（内藤廣建築設計事務所）

審査方法：【一次選考】書類審査（10/7）

【二次選考】公開審査（10/29 @ 坂の上の雲ミュージアム 2F ホール）

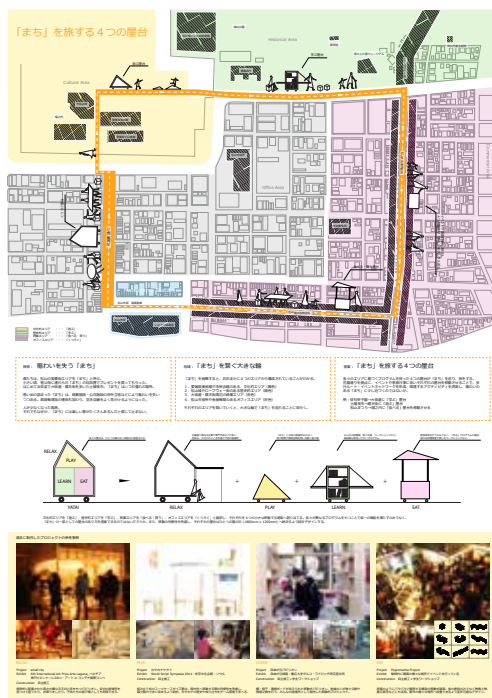
応募総数：21 件

最優秀賞：花園町通り部門 「まちを旅する 4 つの屋台」 キム・テボン

飛鳥乃湯泉部門 「街の中の雲」 バンバタカユキ、田中良典

内藤賞：「街の中の雲」 バンバタカユキ、田中良典

市民賞：「どこでも茶室」 澤田匡亮、池田達海、栗栖諒大、藤岡雄星、田窪一真、中東大成、吉村静流、大林優斗



最優秀賞「まちを旅する 4 つの屋台」



最優秀賞「街の中の雲」

募集期間：2017年8月～10月8日

審査員長：羽藤英二（都市工学者 東京大学 / 松山アーバンデザインセンターセンター長）

審査員：川口学（松山市都市整備部長）

寺尾保仁（（公社）愛媛県建築士会会長）

新山富左衛門（道後温泉コンソーシアム代表者）

泉谷昇（花園まちづくりプロジェクト協議会理事長）

松波雄大（道後オンセナート 2014・道後アート 2015/2016 地元統括責任者）

UDCMスタッフ

審査方法：【一次選考】書類審査（10/14）

【二次選考】公開審査（10/29 @坂の上の雲ミュージアム 2F ホール）

応募総数：14件

最優秀賞：「taiko & café SHINROKAKU ～至福の刻を味わう動くまちづくり拠点～」

篠原知子，大谷藍海，武田美英，山本裕佳，小武海八雲，松下未来，村上萌々

優秀賞：花園町通り「あんないロボット」池崎智花

飛鳥乃湯泉「椿のおもてなし（コスメワークショップ）」渡部千恵美，武井泰子

個別賞：

作品名	賞名
あんないロボット	未来賞
ハナゾノマジック	アート賞
On My Bicycle	ユニーク賞
たた美	癒し賞
SUN SUN ひろば	おひさま賞
「haiku & café GUDABUTUAN」～思索の時を味わう動くまちづくり拠点～	地域ブランド賞
みどりの友達 こけ玉をつくろう	みどり賞
だれでも入れる温泉パラダイスヒミツ基地	きらきら賞
伊予かすりを広めよう!!	ファッション賞
無題	俳句ふれあい賞
子供だけが入れるヒミツ基地	笑顔こども賞
どうぞゆのまち サイコー!!	グッドファミリー賞
「taiko & café SHINROKAKU」～至福の刻を味わう動くまちづくり拠点～	しらさぎ賞
椿のおもてなし（コスメワークショップ）	椿賞



最優秀賞・しらさぎ賞「taiko & café SHINROKAKU」



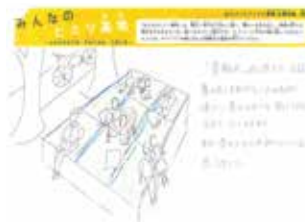
優秀賞・未来賞「あんないロボット」



優秀賞・椿賞「椿のおもてなし」



アート賞



癒し賞



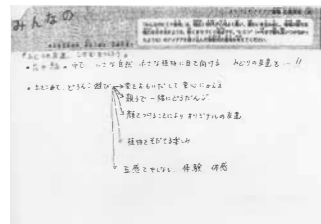
ユニーク賞



おひさま賞



地域ブランド賞



みどり賞



きらきら賞



ファッション賞



俳句ふれあい賞



笑顔こども賞



グッドファミリー賞

(3) ワークショップ

都市設計コンペで最優秀賞を受賞した二つの「移動する建築」は、そのデザインの最終的な調整と実施製作プロセスにおいて、地域住民を交えたワークショップを開催することを条件とした。これは、地域住民の方々との設計・製作プロセスの共有を通じて、花園町通りや飛鳥乃湯泉中庭の空間の使い手を見出し、より活発な活動を引き出すことをねらったものである。2地区のべ6回の市民ワークショップを通じて、デザインや使い方を決めていった。また、並行してそれぞれの地域のまちづくり組織との協議を重ねながら検討を進めた。

なお、都市設計コンペに応募し、惜しくも最優秀賞を逃した地元若手職人団体である伊予匠ノ会（大久保仁志会長）へ連携を申し入れ、地元の技術者との密な協働を達成することが出来た点は本プロジェクトの大きな特徴となった。伊予匠ノ会には、すべてのワークショップに参加してもらった。特に製作ワークショップでは、講師として現場で加工の実演や指導を行っていただいた。

いままでまちづくりとの関わりの少なかった彼らの技術力をまちづくりの文脈へと乗せることができたことだけでなく、今後のメンテナンスなどの継続的な連携や、他事業への連携の展開など、将来的にさまざまに発展しうる貴重なソーシャルキャピタルを得ることができたと考えている。

①デザインワークショップ

日 時：2017年11月19日（日）13時半～16時

場 所：坂の上の雲ミュージアム 3F 会議室

テーマ：花園町通りで何をしたら楽しい？

どうやって雲を浮かばせる？

プログラム：

12:00 現地視察（花園町通り）

12:30 現地視察（飛鳥乃湯泉）

13:30 開会

13:40 南雲勝志さんによる

ショートレクチャー

14:10 アイスブレイク

14:25 ワークショップ

（花園と道後に分かれて実施）

15:30 成果発表と講評コメント

次回のお知らせ

16:00 閉会



花園町通り「まちを旅する4つの屋台」WS風景



道後飛鳥乃湯泉「街の中の雲」WS風景

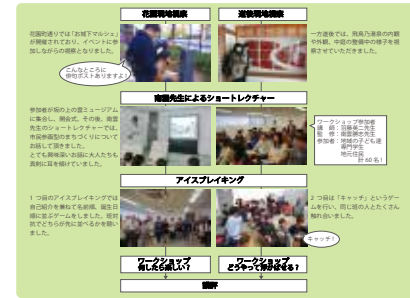
10/28 都市設計コンペの結果のおさらい



11/19 デザインワークショップの流れ

ワークショップ内容・講師については別ページ

入賞した2つの作品は、今後、みなさんとの「移動する建築」ワークショップにおいて出された意見やアイデアによってデザイン、制作されます。今回11月19日(日)に行われたデザインワークショップでは、花園チームと道後チームが選ばれた。この2チームは「花園」と「道後」をどうやって浮かべさせるか(建築)というテーマでアイデアを出し合い、選んだ。子ども・大人・デザイナー総数60人が参加し、みんなで一緒に花園・道後の空間について考えました。



花園 まちを旅する4つの屋台

今回のワークショップテーマ 【この通りで何したら楽しい?】

〈まちを旅する4つの屋台〉のテーマは【この通りで何したら楽しい?】です。子ども2班、おとな2班に分かれて、道中で自由にアイデアを出し合いました。また、それぞれのアイデアを聞いて、設計者のみなさんに実際に設計や施工を聞いてもらい、それをもとに今度は全体で話し合いました。いろいろなアイデアを聞き合ったりして、新たなアイデアもたくさん生まれました。



南雲先生のコメント
有意義なワークショップでした。花園と道後ではテーマも性質も違ったように思います。花園の方が少し難しいのではないかと、それでも、両方の制作ワークショップには個性を作らせてくださっていますから、とても楽しみです。



花園町通りと道後飛鳥の湯泉中庭を「使いこなす」

今年、松山市では「花園町通り」と「道後温泉」の2つの空間が生まれ変わりました。花園町通りでは歩道空間が広場のような空間として整備され、すでにお客下マルシェのようなイベントが開催されるようになっていきます。道後では、道後温泉旅館・飛鳥湯泉が新築され、湯の湯との間に中庭がつけられました。また、中庭に新しい通りの感じが作り、お庭のデザインもこれから変わっていく予定です。わたしたち松山アーバンデザインセンターでは、このような松山の新たな空間を「使いこなす」ことで、より一層魅力的な場所にしていきたいと考えています。そして、その思いを、楽しみ、盛り上げよう。市民のみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

「移動する建築」とは

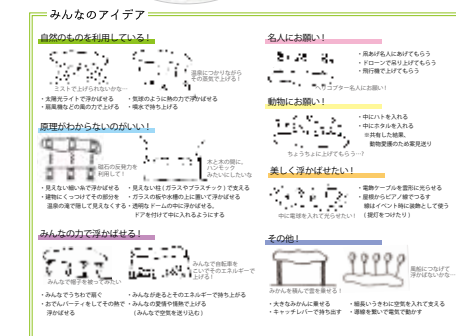
そこで、まちを「使いこなす」ための拠点を市民のみなさんと一緒に作る企画として、「移動する建築」プロジェクトを立ち上げました。ふつうは移動しないはずの建築物が、移動する。つまり、マルシェだったりお祭りだったり、そのときの公共空間の使われ方に応じて柔軟に動く建築的な拠点をたてようとする。そんな「動くまちづくり拠点」をつくりたい。このプロジェクトでは、はじめに都市計画コンペを行い、花園町通りと飛鳥湯泉中庭で「移動する建築」を決定しました。そして今回、デザイナーたちの提案した入賞作品を下さることで、子どもたちや地元住民、関係者たちのアイデアを取り入れたらプロジェクトのデザインワークショップを開催しました。今回は、ここで出されたアイデアを基に制作ワークショップを行い、3月には実際に花園町通り・飛鳥湯泉中庭にて作品のお披露目を行う予定です。



道後 街の中の雲

今回のワークショップテーマ 【「雲」をどうやって浮かべさせる?】

〈街の中の雲〉のテーマは【飛鳥湯泉中庭に「雲」をどうやって浮かべさせる?】です。デザイナーのパンぱん・田中さんがつくってきけた模型を見ながら、子ども大人も一緒に考えては組み立てる。自分たちの雲をイラストにしてみました。参加者約30人からアイデアは10個、その後、みんなが賛成したりしながら、アイデアを共有しました。



地域のの方々を始め、たくさんのお子もたち、技術者たちがそろってアイデアを出し合うというのはいいですね。特に、子どもたちのアイデアはとても魅力的なものばかりだったので、ありがとうございます。今回のアイデアをどう活かすかは、これから大人の責任にかかっていますね。

デザインワークショップ瓦版



第1回製作ワークショップ（左上：「まちを旅する4つの屋台」チラシ，右上：「街の中の雲」チラシ，下：瓦版



移動する建築 HP (<https://idou-kenchiku.amebaownd.com/>)



第2回製作ワークショップ（左上：「まちを旅する4つの屋台」チラシ，右上：「街の中の雲」チラシ，下：瓦版

(4) お披露目会

製作作業は、設計者と伊予匠ノ会ら製作者との協力と努力により、さまざまな課題をひとつひとつ乗り越えて進んだ。花園町通りの「まちを旅する4つの屋台」は、4基の折りたたみ式屋台である。フレームは同形ながら、座面・棚などの仕様が異なる4基の組合せによって、通りに開いたり閉じたりでき、また商い以外のさまざまな活動を受けとめることができる。特にまちなかに子供の遊び場が不足している現状を踏まえ、子供たちが使いたくなるデザインを目指した。また、製作過程では地元職人と対話を重ね、彼らがこの屋台を「自分の仕事である」と思えるようプロセスを共有した。飛鳥乃湯泉の「街の中の雲」は、風船状の「雲」である。その浮かべ方からその下に置かれるイスのデザインまで、ワークショップで参加市民と考えた。例えば、雲形のイスの線は子供たちが描いたものを採用している。雲の生地は松山に工場をもつ帝人フロンティア(株)開発の極薄・高強度・軽量(48g/m²)の特注膜を無償提供してもらい、風でゆったりとやわらかく表情を変化させる浮遊屋根が実現した。

花園町通りのお城下マルシェ開催日であり、道後温泉まつりの前日である3月18日をお披露目会の日と定め、一日で花園・道後を回遊できるように時間帯を設定し、また双方の会場で一句詠んだ方には贈り物をする事とした。果たして、商住が混合する花園町通りでは、子供たちの遊び場にもマルシェの店舗にもなる、配置によって豊かな空間可変性を持つ4基の屋台が生まれた。温泉地である飛鳥乃湯泉では、非日常的で強い誘目性を持ちつつも、浴衣でくつろぐ風景と馴染む雲のような浮遊屋根が生まれた。当日、午前のお城下マルシェと連動して盛況であり、午後の飛鳥乃湯泉もまた数千人の人出であった。メディアにも多く取り上げられ、後日、市民から次のお披露目はいつになるかとの問い合わせが来ている。

日時：2018年3月18日（日）



【花園町通り】

時間 | 9:00 ~ おひろめ行進

9:30 ~ おひろめ式典

10:00 ~ 14:00 一般展示

会場 | お城下マルシェ 花園 - 花園町通り西側ウッドデッキ広場

内容 | 完成した4つの屋台を子どもたちが引っ張りながら、花園町通りを行進して一周。



お披露目会の様子

【飛鳥乃湯泉中庭】

時間 | 13:00 ～ おひろめ式典

13:30 ～ 17:00 一般展示

会場 | 道後温泉別館・飛鳥乃湯泉中庭

内容 | 大きな風船状の『雲』を浮かばせ、その下に雲型の椅子などの家具を配置。

周囲で、椿のおもてなしや綿菓子販売、お菓子販売、ノンアルコールビール試飲、
バルーンアートなどでにぎわいを演出



お披露目会の様子



お披露目会の様子を取り上げた記事（愛媛新聞,2018/3/19）



お披露目会の様子を取り上げた記事（愛媛新聞,2018/3/22）

（５）今後について

人々の多彩な活動を都市のパブリックスペースで展開すること。それによりにぎわいや交流を取り戻すことは、松山に限らず多くの地方都市で求められているであろう。しかし、問題はそのような活動の「担い手」の不足である。担い手不足の背景には、同志が見つからない、活動の拠点やツールがない、またそのデザインができないなど、様々な理由がある。本プロジェクトは、これらを同時に解決しながら、市民ひとりひとりの思いを集め、新たに生まれる二つの広場的空間が魅力的に活用されていくことを目指した。それゆえに、市民の参加プロセスを充実させ、装置のデザインは地域性を重視した。

このような趣旨でお披露目会までプロジェクト運営を行ってきた。今後の運営は、われわれUDCMから、地元まちづくり組織へ徐々に移行していくことを考えている。現在、花園町通りでは、地元まちづくり協議会と活用方針について協議が進み、沿道のマルシェイベントでの活用が決定している。飛鳥乃湯泉では、地元まちづくり協議会や温泉旅館組合、商店街組合、飛鳥乃湯泉指定管理者と協議を行っており、地元イベントでの活用を見据えた運用マニュアルの作成が進んでいる。

地域のパブリックスペースを巡るデザインは大きく分けてふたつある。空間デザイン（ハードのデザイン）と利活用デザイン（ソフトのデザイン）である。今年度行った夏のまちづくりワークショップ「移動する建築」では、これらふたつのデザインを橋渡しするためのツールを開発したと言えるのではないか。移動できるという仮設性や、地域特性を読み込んだデザイン、地域密着の参加プロセスにより、市民による主体的で独創的な活動を誘発し、松山のまちなかに市民が集う風景を創出しつつある。来年度、この運営体制を固め、花園町通りや飛鳥乃湯泉に、市民発の移動する建築が展開することを目指したい。





4 まちづくりの担い手育成：「学ぶ」

「これからのまちづくりの担い手を育てます」

まちづくりは楽しみをつくること。

このまちを舞台に生活をする人たちにもっとまちを好きになってもらえるように、自分が好きになれるように、想いをカタチにする方法を学んでいきます。



4-1 アーバンデザインスクール

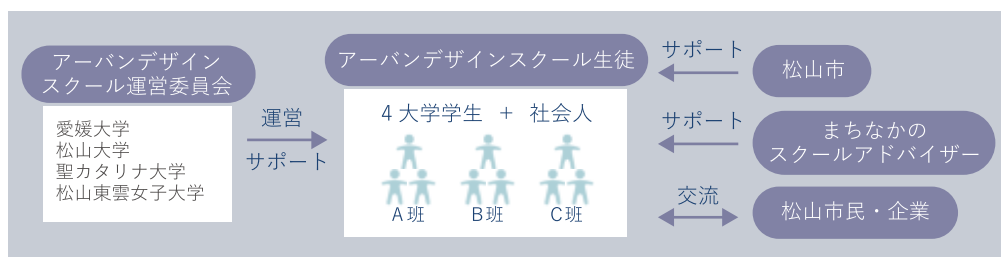
将来のまちづくりの担い手を育成するとともに、まちなかのファンを増やすことを目的として、平成26年11月より、まちづくりを実践的に学ぶ市民参加型の学習プログラム「アーバンデザインスクール」の推進・展開を図っている。

本スクールは、UDCMが母体となり、松山市都市再生協議会のメンバーである松山市内の4大学（愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学）の教員が運営委員会を組織し、活動を遂行している。コンセプトは、「学生から一般市民（社会人）まで、まちへの思いを持った幅広い世代が集い、参加者自らが柔軟な発想と方法でまちづくりを企画・実践する中で、まちづくりの進め方を学んでいく市民参加型・体験型の学習プログラム」である。参加者は、まちとの関わりや多様な人々との交流を深めつつ、まちづくりの企画からワークショップ、市民講座の運営を経て、まちづくり活動の実践に至るまでまちづくりに関わる一連のプロセスを体験し、その中で自ら成長していくと共に、まちの歴史や文化に根ざした松山市ならではの魅力的なまちづくり活動に結実させていくことを目指している。

今年度は、松山市でのアーバンデザインスクールに加え、国が定める連携中枢都市圏構想を受けて、東温市と砥

部町においてもアーバンデザインスクールを開講した。他市町においては、運営委員会に加え現地市職員も運営に加わって頂いた。

松山市におけるアーバンデザインスクールでは28名（内7名が社会人）、東温市では8名（内8名が社会人）、砥部町では8名（内2名が社会人）のスクール生が隔週で集まり、それぞれの地域のまちづくりの課題や楽しみ方について各自が発見をし、それらから各自でテーマを導き、大学関係者や行政、地元関係者との連携の下、まちづくり活動に取り組んだ。



アーバンデザインスクールの運営体制

4-1 アーバンデザインスクール

① 松山アーバンデザインスクール

開催期間：平成 29 年 5 月～平成 29 年 12 月（全 18 回）

開催場所：もぶるテラス（UDCM）

運営：アーバンデザインスクール運営委員会

参加者：28 名（社会人 7 名、大学生・大学院生 21 名）

松山アーバンデザインスクールは、将来のまちづくりの担い手を育成及び、まちなかのファンを増やすことを目的とした「まちづくりを実践的に学ぶ市民参加型の学習プログラム」である。UDCM が母体となり、松山市内の 4 大学（愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学）の教員が運営委員会を組織して活動を行っている。また、まちなかのスクールアドバイザーとして、まちづくりを実践されている方、地域の商店主の方、NPO、まちづくり組織など、各分野で活躍している方からも支援を受けている。

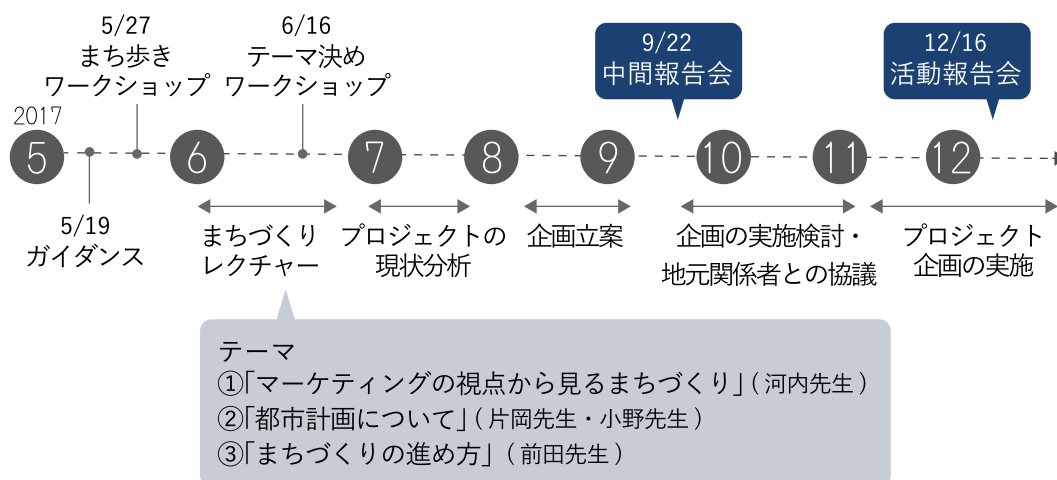
スクール生はプロジェクトチームにわかれ、まち歩きやレクチャー、ワークショップを通じてまちの課題や魅力を

発見し、地域住民との意見交換、協働を経て、その中で自ら成長していくと共に、まちの歴史や文化に根ざした松山市ならではの魅力的なまちづくり活動に結実させていく。

1 期目では、25 名のスクール生が 7 つのプロジェクトを、2 期目では 29 名のスクール生が、7 つのプロジェクトを実践した。今年度の 3 期目では、28 名のスクール生が 6 つのプロジェクトを実践するに至った。以下、それぞれのプロジェクトの概要を紹介する。



スクールの様子



■ かやまちクラブ

松山城の西側、歴史あるかやまち商店街は、近世から近代初期までは栄えたが、近年はシャッターが閉じている店も少なくない。一方で、卵の専門店、食パンの専門店、角打ち（立ち飲み）ができる酒屋など、個性あふれる専門店が存在する点においては、とても魅力的な場所である。本グループは、個々のお店の魅力を紹介して商店街を盛り上げたいという想いで活動を開始した。

かやまち商店街を校区とする味酒小学校は市内最大級の児童数を誇る。つまり、この商店街近隣には子育て世代が多く居住しているはずである。事前アンケートの結果、既にかやまち商店街を利用している人は「お店の人が優しい」などと回答し満足度が高い一方、行ったことがない人は「対面販売に慣れていない」などと回答し、最初の一步が踏み出せていないことがわかった。これに着目し、親子で商店街の魅力を体験出来る企画として「かやまちクラブ」という体験型プログラムを検討した。企画実施には、

かやまち商店街組合の日下部氏、中野氏、味酒地区まちづくり協議会の村上氏の協力を得た。対象は小学生と親御さんの親子ペアとし、小学生にはかやまち商店街で過ごした楽しい思い出をもってもらうこと、親御さんにはかやまち商店街での対面販売への心理的ハードルを下げる機会を提供することを目標に企画づくりを行った。第1回として、ミックスジュースづくりイベントを実施した。かやまち商店街の八百屋をめぐる店主に旬のものの見極め方などを聞いた上で、野菜や果物を購入してもらい、それを用いてミックスジュースをつくる、というものである。店主との交流を仕込むことで、対面販売への心理的ハードルを下げることを意図した。結果としては、たいへん好評で、対面販売への抵抗感も薄れていた。2018年度より、2-3ヶ月に一度のペースでかやまちクラブを継続開催する予定である。



天神祭での事前調査



第1回かやまちクラブの様子

■ 伊予絣班

松山は住みやすいけれどあまり特徴がない、友達が松山に来た時に紹介できるネタが少ないという実感を基に、地域資源の活用策の創出を基本方針とした。最初に班員それぞれで松山の地域資源を調べ、興味を持ったものについて話し合った。そこで出た「伊予絣」は班員全員が知らず、松山の地域資源として浸透していないのではと考えた。

伊予絣について調べてみたところ、二百年前からあり、かつて生産量日本一だったことや、日本三大絣の一つであることなど、愛媛県が誇れる地域資源であることが分かり、この活用策を検討することとした。

かつては一大産業であった伊予絣も、様々な要因によって衰退し、私たちの生活の中で伊予絣を目にする、触れる機会はもはやあまりない。そこで、まずは伊予絣を目にしってもらう機会をつくり、伊予絣に触れ興味を持ってもらうことを目指すことにした。これを通じて、伊予絣が松山における歴史的な地域資源であるという認識を、多くの人に

形成してもらうということを目的に据えた。

活動場所を選んだ道後温泉は、楽天トラベルが毎年発表している「ココロ潤う。おんな一人旅に人気の温泉地ランキング」において、3年連続1位である。また、環境省・観光庁後援の「温泉総選挙 2016」でも女子旅部門第1位を獲得するなど、女性から熱い視線を集めている。そこで、道後温泉へ観光に来た女性を対象とし、伊予絣を使ったアクセサリーのハンドメイド体験ワークショップを開催することにした。アクセサリーは、ヘアゴム・ブローチ・ピアス・イヤリングの四種類を設定した。伊予絣の生地から自分好みの柄を選び、完成したアクセサリーに好きなパーツを付けることで、自分だけのオリジナルアクセサリーを制作することができるようにした。

実施した結果、女性観光客よりも家族連れや地元の方への反応の方が極めてよく、ターゲットはむしろ地元にあるのではないかという発見があった。



様々な伊予絣



ハンドメイド体験ワークショップ

Nexus

このグループは、『農作物の販売』に興味があったメンバーと『作物の生産・循環型社会』について興味があったメンバーが、「農業」というテーマで融合して組織した。消費者と生産者をつなぎ、人々が滞留する空間をすることで、「作る、食べる、廃棄する」という食物循環を、様々な方法で体験してもらうという目標を掲げた。

11月に行った初回の活動場所として選んだのは、花園町通りで開催される「お城下マルシェ」である。ここに、農業をテーマとしたブースを設けることを企画した。メンバーの知人の紹介で、みかん農家さんである野本昌平さんと知りあい、協力してもらう運びとなり、ともにみかんの袋詰めとプチ収穫体験を実施した。また、「食物の循環」と「野本さんの農業に対する想い」をテーマにした情報誌を配布した。当日は、城山公園で行われていた「松山産業まつり」に出かける人も多く、花園町は通行人でとても賑わっていた。家族連れで来ていた方々や、みかんを安く買

いたい人たちをターゲットに宣伝広報を行った結果、営業終了間際に無事完売した。

12月に行った二回目の企画は、11月のイベントで収穫体験をしてくださった消費者の方々に再度来てもらえるように、愛果28号の引き換え券を渡すことにした。ここでは、みかん詰め放題、生絞りホットみかんジュースの提供、みかんツリーの制作を実施した。みかんツリーとは、食べたあとのみかんの皮を乾燥させ、それを飾り光らせることでできる、幻想的で新しいクリスマスツリーである。このツリーを通して、少しでも食物の循環について感じてもらいたいという想いを込めた。しかし、業開始直後に降ってきた雨により気温も急降下し、通りを歩く人の量が大きく減少。前回ほどの売上を達成することはできなかった。

小規模ながら目的を達成できたと自己評価するが、天候による影響が大きい屋外イベントの難しさや、目的に対して活動メンバーの人数がまだ不足している点など、課題が見えてきた。



11月のイベントの様子



12月のイベントの様子

Ⅰ 公園まちづくり@松山

松山市の中心市街地には、広大な芝生広場や美術館、図書館を有する都市公園「城山公園」があり、朝夕は学生やサラリーマンなどの通り道として、休日は大規模イベントの会場として利用されている。イベント時は多くの人で賑わうが、イベントが開催されないときは、規模に対して人はまばらで寂しい印象を受ける。この城山公園に眠るポテンシャルを引き出すため、季節毎に公園での楽しみ方を提案し、定着へ向けた方策を探った。プロジェクト第1弾は「おしゃれピクニック」である。ピクニックをする際に、ハードルとなるのは準備である。シートなどのグッズを買い揃え、弁当を作るとなると前日から準備する必要がある。ピクニック文化が根付いていない現状を踏まえると「手軽さ」は必須である。そこで、ピクニックグッズの貸出サービスを行うこととした。手ぶらで公園に来て、グッズをレンタルしてピクニックをするという流れである。これなら手軽にピクニックを楽しむことができる。この貸し出し自体をイベント化することとし、「ルリイロサンド」のキッチンカーや、ヨガ講師、またフォトジェニックな演出の仕掛けとしてフォトプロップスをつくるワークショップの講師を招聘するなどし、イベントへ来たいくなるような仕掛けを用意した。なお、フードトラック・ヨガ・フォトプロップスワークショップに関しては、売上の20%を手数料として納めていただくよう調整した。なお、ヨガ講師のカイ先生は「公園の利活用のために」と売上を全額寄付してくださった。公園の使用については、松山アーバンデザインスクールの所管課である松山市役所 都市・交通計画課から公園管理者である公園緑地課に公益的なイベントである旨を説明してもらい、使用料の支払いは免除された。

イベント開催予定日の10月15日は雨予報だったため翌週に延期したが、延期日も台風のため開催できず、結局

11月26日に開催することになった。1ヵ月以上遅れたため、当初は考えていなかった寒さ対策も必要になった。当日の降水確率は終日50%。準備中に小雨が降り出したため、あらかじめピクニックシートを配置することはできなかったが、諦めずに雨が上がるのを待った。イベントも終盤に差しかかった頃、雨が止んだため、寒さ対策としてあらかじめ準備していたコタツを出し、芝生広場のコタツでみかんを食べたり、トランプをしたりし、来園者の注目を浴びた。結局、ピクニックグッズの貸し出しはできなかったが、多くの方が立寄ってくれた。

ピクニックイベントは一日限りだったが、いつでも気軽にピクニックできないと意味がない。そこで、公園内のカフェレストラン「the park M's coffee」にピクニックグッズの貸出サービスを提案し、快諾していただいた。店長の吉田様に有料・デポジット制の貸出を提案したところ「喜んでくれるなら無料でいい」と太っ腹な回答を頂いた。

3月中旬から、ホットドックやドリンクなど、テイクアウト商品を購入された方に無料でシート・トレイを貸し出すサービスを開始する予定である。

今後は、冬は凧あげ、春は長縄跳び、夏はナイトピクニックというように、今後も季節毎に公園の新しい使い方を提示していく。人と公園を繋ぎ、仕組みをデザインする役割として、公園とまちを変えたい。



11月のイベントの様子

Ⅰ 休日プランナーズ

松山市の中心市街地である大街道や銀天街近辺では、多くの人々が行き交い、平日・休日とも賑わいを見せている。しかし、商店街のアーケード内の店舗を見ると、全国規模のチェーン店も少なくない。もちろん、チェーン店には「入りやすい」「値段が手頃」など、チェーン店ならではの良さもあるが、店舗の売り上げが地域外に流出していることも事実だろう。一方、アーケードから一本裏に入った裏通りに目を移すと、地元ならではの魅力的なお店がたくさんあることに気付く。アーケードのある表通りを歩いているだけでは、なかなか目に留まり難い。裏通りが気になっているけど、入るのに躊躇している人もいない。そこで、私たちは、こうした裏通りの魅力を皆にもっと知ってもらい、裏通りを楽しんでもらいたいと考え、この活動をスタートした。

企画のコンセプトは、「裏通り」でしか過ごせない「休日」の楽しみ方を提供すること。そのターゲットは、グループメンバーと同世代の若者に絞った。裏通りを何度も歩き、構想を膨らませた。それぞれのメンバーがこだわりを持ち

ながら楽しく作れることを大切に、「休日」と「裏通り」に加えて、それぞれのメンバーが「好きなもの」を掛け合わせた紹介ページをそれぞれ作成することになった。4人のメンバーが選んだテーマは、それぞれ「休日」×「裏通り」×「ご褒美さんぽ」、「?」、「糖分」、「究極デート」の4つである。テーマ決定後は、各自店舗等への取材を行った。また、「街中の裏通りを紹介していること」と「ここだけは外して欲しくない、必ず見に訪れて欲しい」ことを掛け合わせ、フリーペーパーの名前を『MUST (Machinaka Ura Street Times)』とし、プロの編集者の方からもアドバイスをいただきつつ仕上げていった。紙面デザインは、松山ビジネスカレッジの篠原さんにご協力いただいた。

今後、「休日」×「裏通り」×○○の部分を変更したり、シーズンに合わせた内容のものにしたりして、バリエーション豊富な『MUST』の発行を検討したいと考えている。ただし、出版費用の問題をどう解決するかが最大の難問である。今回は、『MUST』発行の第一歩という位置づけのため、フリーペーパーという形態をとったが、今後は販売という形をとったり、広告費を募ったりするなど、出版費用を賄うことも検討すべきだと考えている。



話し合いの様子



『MUST』ご褒美さんぽ

■ まつトラムラリー

松山市の路面電車は、本数も多く便利であるものの、乗り慣れない利用者にとっては路線や乗り方についてハードルがあるのも事実である。そこで、松山の魅力を再発見してもらいながら公共交通に親しみを持ってもらうことを目的とし、昨年度に引き続き松山の路面電車を使ったクイズラリーを企画・実施した。クイズの作成については、松山市の歴史、文化、地理などの項目について文献調査や現地踏査を行い、現地に行ききりと周遊することのできるクイズになるよう試行錯誤した。また、ターゲットは子どもとしていたが、同行する保護者の方も楽しめる難易度になるよう、出題形式や言い回しの配慮にも努めた。

参加者にはスクラッチカードとクイズ集を配布する。カードにはスクラッチが5行3列並んでおり、各行3つのスクラッチの中から1つを選んで削ってもらい、出てきた番号に該当するクイズに答えるために、路面電車を使ってヒントのある駅まで行ってもらい、クイズ集のクイズを解いてもらう、という仕組みである。なお、問かなかったクイズについても関心を深めてもらえるように各問題を解説した解説集を作成し、ラリー後に配布した。

当日は51名の参加。各自1dayチケットを購入してもらった。道後温泉駅前広場をスタート地点とし、ルール・注意事項の説明を行い、クイズ集、スクラッチカードを配布してからラリー開始。参加者は各自クイズラリーを進め、2時間～3時間程度でゴールした。参加者の様子としては、たとえば、「松山市駅の地下街にいるまつちカッパの似顔絵を描こう」というクイズに対して、熱心に描いて来てくれたり、電停では電車の乗り方を確認している様子が見られた。ゴール後は答え合わせを行い、解説集と景品のクリアファイルを渡して終了。保護者の方には本企画の感想や評価に関するアンケートに答えていただいた。

参加者からは、「本格的なラリーだったので楽しく過ごせた」、「クイズの内容が大人でも楽しめる内容だった」などの感想もあり、好評であった。さらに、後日、愛媛結婚支援センターより婚活イベントにまつトラムラリーを取り入れたいという依頼を受け、波及効果を生むことができた。この婚活イベント当日もメンバーが協力し、県外から来られる方、市内に住んでいる方の両者が公共交通、松山に親しみを持ってもらえるようクイズ内容、ルートを考案し、大盛況となった。



電停で乗り方を確認している様子



答え合わせの様子

4-1 アーバンデザインスクール

② 東温アーバンデザインスクール

開催期間：平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月（全 10 回）

開催場所：横河原ぷらっとHOME

運営：アーバンデザインスクール運営委員会、
東温市役所

参加者：3 名（社会人 6 名、うち 3 名は地域おこし協力隊）

スクール企画初めての全員社会人という構成であった東温アーバンデザインスクールの 2 期目は、活動開始直後より具体的な企画案の検討が進んだ。個々に取り組みたい内容をプレゼンテーションし、その動機やねらいを確認していくうちに、東温各所の地域資源を持ち寄り、さまざまな場所を巡りながらそれらをアピールする巡業形式の企画「とうおんまちづくりラボラトリー」がふさわしいのではないかと考えられた。

個々の企画内容としては、東温で採れた自然素材（木の枝や松ぼっくりなど）を用いて手作りの楽器を製作し、その場で演奏するというワークショップ、井内地区などで採れた農作物の販売、滑川地区の湧水で淹れたコーヒーやサイダーの販売などである。

これらの実践活動第一弾として、10 月 21 日（土）に開催された井内地区の「新米祭り」において、自然素材を使った楽器製作ワークショップと、滑川清流コーヒー・サイダーの販売を行った。峠の茶屋と呼ばれる納屋状のスペースに出店し、新米祭りの来場者をもてなした。なお、同時開催として、スクール生が約半数を占める「Namegawa バンド」の演奏も行い、大いに盛り上がった。

この後のスクールでは、今後、仲間を増やしていくためのプラットフォームとしてまちづくり団体を組織することがスクール生から自発的に宣言された。団体名は「とうおんまちづくりラボラトリー」であり、メンバーはスクール生の 6 名と滑川地区の自治区長（スクールにはほぼ毎回出席し、実質的にはスクール生であったと言ってよい）

および東温市役所のスクール担当者の計 8 名である。そのミッションとして「小さな『出来ること』で、まちの価値を発見すること、まちに新しい価値をつくること、そして発信していくこと」を掲げ、「いろいろな人が参加して、まちを楽しむことを一番に活動」するとしている。

次の実践活動は、11 月 10 日（金）に行われた大街道での「高齢者祭り」における出店であった。地域農産物と清流コーヒーの販売が行われ、また Namegawa バンドの生演奏も行われた。

これら 2 つの実践活動のふりかえりを行う中で、継続した活動にむけた屋台の製作が提案された。二度の活動を通じて、おおよその準備段取りがわかったため、この経験を踏まえてオリジナルの屋台を製作すれば、出店効率も高まり、またイベントでの注目度も高まるであろうというねらいである。このような意見を踏まえて、UDCM から建築デザイナーを紹介。スクール生との議論を踏まえて、自由度が高く柔軟に展開できる屋台の設計案が提案され、実施製作に移された。年度を跨ぐことになったが、この屋台は 4 月 1 日（日）に横河原駅前で行われた朝市である「横市」にてお披露目を果たした。

2 度の実践とフィードバックを繰り返し、活動の改善・発展を行ったという点において、非常に充実したスクール活動であった。また、この一連の活動の中でチームが生まれたというのも極めて有意義であったと言えよう。未来の東温のまちづくりの種が、確実に芽吹いたようである。



イベントの様子



屋台の設計案

4-1 アーバンデザインスクール

③ 砥部アーバンデザインスクール

開催期間：平成 29 年 9 月～平成 30 年 4 月（全 12 回）
 ＊中間報告会を含む
 開催場所：砥部町中央公民館、もぶるテラス（UDCM）
 運営：アーバンデザインスクール運営委員会、
 砥部町地域振興課
 参加者：8 名（社会人 2 名、大学生 6 名）

スクール生は、まちあるきや運営委員の講師らによるレクチャーの受講、またヒアリング調査や文献調査を実施した。これらの活動を経て、「大南商店街には人が集えるような場所が少ないこと」に着目し、「商店街の人、お客さん、関わった人みんなが笑顔に」をモットーに活動を進めた。行政や地元関係者との話し合いを通し、「Home 古民具 Day」というイベントを企画した。平成 29 年 9 月から約 7 ヶ月間の活動をおこなった。詳細なスケジュールについては、右の表の通りである。

授業スケジュール

授業回	日付	内容
第 1 回	2017.9.14	ガイダンス・自己紹介
第 2 回	2017.10.1	まちあるきワークショップ
第 3 回	2017.10.12	鳴海邦碩先生による講義
第 4 回	2017.10.19	ワークショップ
第 5 回	2017.10.26	ワークショップ
第 6 回	2017.11.9	プロジェクト企画①
第 7 回	2017.11.16	プロジェクト企画②
第 8 回	2017.12.7	プロジェクト企画③
第 9 回	2017.12.16	中間発表会
第 10 回	2018.2.15	プロジェクト実践準備①
第 11 回	2018.3.6	プロジェクト実践準備②
	2018.3.17	イベント実施
	2018.3.18	イベント実施
第 12 回	2018.4.11	振り返り・今後について議論



まちあるきの様子



当日のスケジュール

Home 古民具 Day

大南商店街とは、砥部町の中心部に位置し、中小商店が立ち並ぶ商店街である。この商店街に人々が集う場所が見当たらず、そのような拠点を作ることで、今後の大南商店街のことなどを考える機会が増えるのではないかと考えた。そこで拠点となりそうな場所として、「昔の暮らし館」が挙げられた。昔の暮らし館とは、昔の古民具が多く展示されている施設であり、ほぼ商店街の中心に位置していること、普段は使われていないものの活動が可能と思われること等から選ばれた。

本イベントは、昔の写真を基に大南商店街や砥部町の今昔について話す「トークタイム」と、昔の暮らし館に展示されている古民具を使った「モノボケ大会」の2つの企画から構成されており、2018年3月17日と18日の2日間に渡って実施された。「トークタイム」では、地域の方々から大南商店街をはじめとした砥部町の昔の風景や人物が写る写真をお借りし、それを基に、イベント参加者の方々に当時の思い出や今後の大南商店街について語り合っていた。また話に出てきた内容については、大南商店街の地図へ書き込んでいった。「モノボケ大会」では、イベント参加者に昔の暮らし館内に展示された古民具を使って、モノボケを披露してもらうことを企画した。小学生等の若い世代を対象にしたものの、参加者が集まらず、スクール生がモノボケを披露した。事前に学校を通してイベントについて周知していたものの、集客できなかったため、この点については今後の課題である。

イベント参加者は2日間を通して30名であった。今回の活動で、貴重な昔の写真を数多く入手し、大南商店街での数々の思い出をお聞きした。今後は、これらの素材をどのように活用していくかが当面の検討事項である。



トークタイムの様子



モノボケ大会の様子



地図への書き込みの様子

4-2 アーバンデザイン研究会

松山のアーバンデザインについて考える場として、これまで様々な分野の専門家をゲストに招き開催してきた。今年度は10月に第9回、11月に第10回を開催した。

はじめに、松山アーバンデザインセンターの尾崎ディレクターがこれまでの活動報告として、近年松山で行われているさまざまな公共空間のデザインについて解説を行った。その上で、関西各地の都市環境デザイン、まちづくりを支援されている鳴海氏に、「魅力ある都市のかたちとは」という題目で基調講演を行っていただいた。ダンサーの聖地化したポンテ広場や、「まちで座れることも人権」としたのだナ・イス祭り、河川に係留した船上カフェなど、使い方を含めた都市のデザインに関する非常に豊富な事例を知る稀有な機会となった。また質疑応答の時間には、その哲学にまで議論が及び、鳴海先生より、大人たちの都市での振る舞いを子供たちが見て覚え、それが都市文化となるため、いかに大人が都市空間を魅力的に使いこなすかが、未来の都市にとって極めて重要であるという指摘があった。

第9回アーバンデザイン研究会 「魅力ある都市のかたちとは」

日時：2017年10月11日（水）15:00～18:00

場所：もぶるテラス（UDCM）

参加者：約40名（大学関係者10名、行政職員18名ほか）

ゲスト：鳴海邦碩氏

（大阪大学名誉教授、関西大学客員教授）



Guest speaker
鳴海 邦碩 氏
Kunihiko Narumi



Profile
1944年、東京生まれ。大阪大学名誉教授、関西大学客員教授。
京都大学大学院修了。工学博士。都市計画、都市環境デザインが専門。
日本都市計画学会元会長。主な著書に、『都市の食料空間』『都市の魅力アップ』『まちづくりの未来を求めて』『都市のデザイン』『都市デザインの手法』など多数。サントリー学芸賞、不動産協会賞など受賞。

会場：もぶるテラス（松岡3丁目7-12）
参加費：定員30名（申込先着順）



【主催・お申込先】松山アーバンデザインセンター
愛媛県松山市湊町3丁目7-12
電話番号：089-968-2921
E-Mail: udc.matsuyama@gmail.com（お名前、ご連絡先を記入）

第9回アーバンデザイン研究会

松山市では、先日、道徳空間再開発による影響を行った花屋町通りが竣工し、この歩行者中心の道徳空間において、ベンチでゆったり、マルシェなどのイベントを楽しむことができるようになりました。また、ここ数年、大街道商店街の一番町口の整備や、中央商店街での盛り場、みんなのひろば・もぶるテラスなど、多くの街の魅力アップに繋がりを取り組みが進められています。今回は、ゲストに大阪をはじめ関西各地の都市環境デザイン、まちづくりを支援されている鳴海邦碩氏をお招きし、魅力のあるまちについて考えたいと思います。

Program 2017年10月11日（水）

15:00-15:20：UDCMの活動報告
UDCMディレクター 尾崎佳
15:20-16:50：鳴海邦碩氏講演
「魅力ある都市のかたちとは」
16:50-：トークセッション、意見交換

第9回研究会の案内チラシ

パブリックな機能を有する施設にも、民間的ブランディング・経営ノウハウを導入することで、より豊かで持続可能な運営が可能となるという観点から、さまざまな先進事業に取り組まれている広瀬氏よりご自身の経験に基づいた講演をいただいた。その後、会場からの質疑およびディスカッションを行った。ホテルクラスカは老朽化したホテルのリノベーションプロジェクトである。低層階にイベントスペースやギャラリー、クリエイターのシェアオフィスを埋め込み、中層がホテル、高層部はクリエイターの居住スペースとするなど、一般のホテルとはまったく異なる複合施設となっている。特に低層部はパブリックな価値を有しており、このような差別化をより積極的に考えていくことの有用性が指摘された。質疑応答の時間には、契約書の重要性について議論が及び、事業進行中に立ち返ることのできる強度のある哲学を契約書として共有することの重要性が語られた。

第10回アーバンデザイン研究会 「新しい第三セクターをつくる」

日時：2017年11月22日（水）18:30～20:30

場所：もぶるテラス（UDCM）

参加者：37名（大学関係者2名、行政職員15名ほか）

ゲスト：広瀬郁氏（(株) トーン&マター代表取締役）

第10回アーバンデザイン研究会

新しい第三セクターをつくる

「公共だけ」「民間だけ」では、実現できないまちづくりがあります。
箱からでなく運営から運営した場の活性化が求められるようになり、PPPやエリアマネジメントの手法が新しい局面に入りつつあります。
公共と民間が連携した様々な事例を紹介しながら、みなさんと一緒に、新しいまちづくりの方法について考えていきます。

イラス、都市計画・建築・まちづくりの専門家

ひろせ いく
広瀬 郁氏 株式会社トーン&マター代表/プロジェクトデザイナー
1973年生まれ。建築家・建築設計事務所、建築コンサルティングファーム、不動産ディベロッパーに勤務し、2008年に独立。企業・行政などの「組織」と「クリエイター」をつなぎ、斬新性の高い多様なプロジェクトに参画している。

2017年11月22日（水）
18:30～20:30（開場18:00）
松山アーバンデザインセンター 1F
（松山市湊町三丁目7-12 もぶるテラス）

参加申込み・お問合せ先
氏名・所属団体・連絡先（メールアドレス・電話番号）を明記のうえ、メールまたは電話でお申し込みください。定員超過による連絡がない限り、ご参加いただけます。
メール udcm.matsuyama@gmail.com / TEL 089-968-2921（担当：小野）
主催 松山アーバンデザインセンター

参加無料
定員30名

第10回研究会の案内チラシ

4-3 歴史文化まちづくり研究会

松山市の歴史文化を学ぶ場として、今年度は、子規・漱石生誕 150 年に合わせ、松山での二人の交流の一端を追体験するイベントを企画・実施した。

正岡子規の友人夏目漱石が英語教師として松山中学校に赴任してきたのは、明治 28 年 4 月のことである。

一方、正岡子規は、4 月、従軍記者として清国に従軍し、結核を悪化させ 8 月帰国する。須磨療養所を経て、ふるさと松山の地を踏んだのは 8 月末である。子規は漱石の計らいにより下宿宿・愚陀仏庵で 52 日間の共同生活を送っている。この間、子規は松風会のメンバーや漱石を誘い、或いは単独で、松山近郊に 5 回の吟行を行い、その足跡を『散策集』に書き残した。10 月 6 日は漱石と二人で道後に吟行している。

アーバンデザインセンターでは、関係機関と連携し、散策集に記されている二人の足跡を辿りながら、二人の俳句から当時の道後湯之町の風景を想起すると共に参加者自らが句作を行うこととした。

ウォークに先立ち、宮崎光彦会長が、明治 28 年 10 月 6 日子規・漱石が道後へ吟行にきたことを紹介し、今後 10 月 6 日を「子規・漱石の道後記念日」として制定することを宣言した。元五輪女子マラソン選手土佐礼子氏も参加し、安全な歩き方などをアドバイスした。約 40 名の参加者は、当時の道後の風景や施設の紹介などを聞き、句作をおこなった。参加した大学生は、「28 歳の子規さん、漱石さんが文明開化の進む道後温泉周辺を意気揚々と歩く様子を実感できた」と感想を述べた。地元関係者は、今後、俳句に親しむ道後のイベントとして定着させたいと考えている。

「子規・漱石の道後記念日」

～子規・漱石がたどった道後～

実施日時：10 月 6 日（金） 13：00～16：00

ルート：放生園～道後温泉本館～鷺谷墓地・大禅寺跡～

宝厳寺・鴉溪（現・ふなや旅館庭園～飛鳥乃湯泉）

主催：UDCM、坂の上の雲ミュージアム、

道後温泉誇れるまちづくり推進協議会、

道後温泉商店街振興組合、道後温泉旅館協同組合、

飛鳥乃湯泉

協力：子規記念博物館、FM 愛媛

参加者数：約 40 名 無料

※ FM 愛媛中継 子規・漱石が愚陀仏庵を出て道後に吟行した当時の様子やルートなどを織り交ぜながら、藤田晴彦氏が宝厳寺特設ブースでゲストと対談した。

MC：藤田晴彦

ゲスト：子規記念博物館竹田美喜館長、

道後温泉旅館協同組合河内広志副理事長、

道後商店街振興組合三好隆理事長、

道後温泉誇れるまちづくり推進協議会

宮崎光彦会長、

同会・山澤満・香奈、萬翠荘八木健館長、

坂の上の雲ミュージアム館長松本啓治



開会挨拶



準備運動



本館紹介



鴉溪紹介



鷺谷墓地紹介



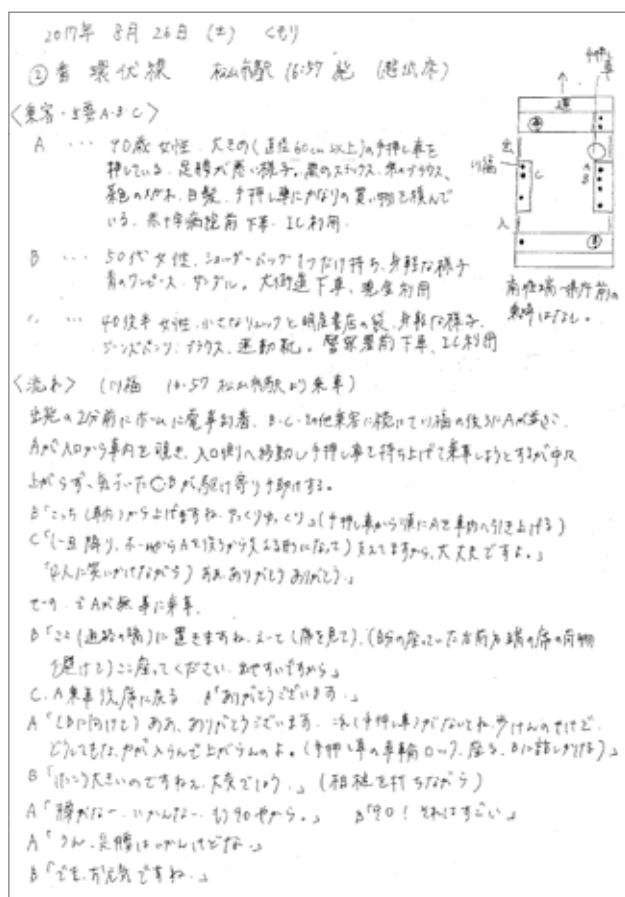
宝蔵寺紹介

4-4 松山交通研究会

最近のわれわれの日常生活では、買い回り品を購入する際もスーパーに行くことが多く、友人と一緒にいく飲食店でも個室化する傾向が強まり、見知らぬ他者とのコミュニケーションがますます減少している。そのようななか、公共交通の車内は見ず知らずの他者同士で話をしたり、隣の人の話に聞き耳を立てたり、他者との貴重なコミュニケーション空間として機能していると考えられる。そして、このような公共交通の車内におけるコミュニケーション行為の相互作用によってよい雰囲気形成していくことは、その土地の文化形成（おもてなし文化）にもつながると期待される。そこで、これまで鉄道やバスなどの公共交通は、大量輸送手段として渋滞緩和や環境負荷の低減の観点で評価されてきたが、コミュニケーション空間として評価することを試みた。

2017年11月から2018年1月にかけて伊予鉄道の市内電車に乗り込み、車内での乗客同士のコミュニケーションを観察、そのときの車内の様子をもとにフィールドノートを作成し、107場面を収集した（下図参照）。それらに対人コミュニケーションの分類にしたがって、他者行為を会話する、ふれあう、物を提示する（渡す）、他の乗客の帮助（座席を譲る等）に分類した。その結果、会話するがもっと多く81事例、続いて物を提示するが12事例、他の乗客の帮助が9事例となっていた。また、それらの対人コミュニケーションが生じるきっかけについて考察したところ、他者を見る行為が最も多く22事例となっていた。車両形状ごとに特徴をみると、2017年から導入された新型車両では運転席付近の座席位置や低床化された車体など車両に関する事柄が多く、出入り口に段差がある旧式車両では子どもや知人をみつける行為など人に関する事柄が多かった。これらのことから新型車両ではモノがコミュニケーションのきっかけになる一方で、旧型車両では周囲の人に目を向けることから始まる特徴が明らかになった。

文化とは社会が共有している行動様式であることから、豊かな文化を誇るのであれば、松山城や道後温泉本館などの文化財だけでなく、住民の日常的生活そのものを美しくしていくことが必要とされる。そうした観点から、市内電車などの公共空間における他者とのコミュニケーションは松山の豊かな文化を醸成する大きな役割を担うと考えられる。



市内電車のフィールドノートの一例

4-5 ラジオ音楽ドラマ「架空のまち」制作

1. 声優ワークショップの開催

正岡子規、夏目漱石生誕150年を記念し、まちづくりへの機運を醸成するとともに発声の訓練や制作プロセスを通じて人と人のつながりをつくりながらコミュニケーション能力、自己表現能力の向上など、人材育成に寄与することを目的として、まちなかの活性化に奮闘する青春ドラマ「架空のまち」子規、漱石の青春番地(第3編完結編)を昨年に引き続きFM愛媛と連携して制作放送した。

第一線で活躍するプロの声優森一馬さんが、公募で集まった市民と河原パティシェ・医療・観光専門学校のタレント・声優科の学生を対象に、声優の技術や表現方法をトレーニングし、オーディションを行い、配役を決め配役に従って指導し番組を作っていた。

講師から基本的な事項のレクチャー後、一人ひとりの発声について、丁寧でユーモアを交えた指導があった。専門学校生や大学生、主婦、公務員、会社員、介護士など50名のさまざまな職業の人達が熱心に2回のワークショップを受講し、12月2,3日で収録した。その成果として、平成30年1月2日に正岡子規、夏目漱石生誕百五十年記念ラジオドラマ「架空のまち」(第3編)がFM愛媛で1時間放送された。

今回のワークショップ終了後のアンケート調査では、「参加してどうだったか」の質問に対し、ほぼ全員の方から「とても良かった」、「良かった」との回答を得た。また、「自分の成長を感じ取れた」、「楽しく出来た、勉強になった」などの意見を頂くなど、参加者にとって達成感を味わうことが出来たワークショップとなった。

声優ワークショップ

第1回：平成29年10月14日(土)、15日(日)

第2回：平成29年11月18日(土)、19日(日)

収録日：平成29年12月2日(土)、3日(日)

場所：河原学園、松山アーバンデザインセンター、FM愛媛

参加者：一般 30名 20歳～68歳
河原学園 20名 16歳～28歳

指導者：森一馬氏(声優)

助手：犬飼奈穂氏、松岡恵氏

番組タイトル：正岡子規、夏目漱石生誕百五十年記念
ラジオドラマ「架空のまち」(第3編)

ラジオ放送日：平成30年1月2日 9時～10時

放送局：FM愛媛

主催：愛媛大学防災情報研究センター・松山アーバンデザインセンター、FM愛媛、河原学園

後援：松山市

第3回 ラジオドラマ
声優候補生募集
[25人限定] 締め切り◆定員に達し次第

声優 森一馬さんが
トレーニング

2018年1月、放送予定
企画・制作・監修・演出・編集・録音・放送
FM愛媛 ラジオドラマ

「架空のまち」
～子規、漱石の青春番地～
[第3編完結編]

声優ワークショップオーディション

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

募集期間：①10月14日(土)13時～15時(河原学園)
②10月15日(日)13時～15時(河原学園)
募集対象：河原学園7年生以上、社会人、学生、主婦、公務員、会社員、介護士など
定員：25名(定員に達し次第募集終了)

募集場所：河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園) / 河原学園7号館1階(河原学園)

声優ワークショップのチラシ



第1回ワークショップの様子（参加者 1日目 25人 2日目 24人）



第2回ワークショップの様子（参加者 1日目 22人 2日目 24人）



収録ワークショップの様子（参加者 1日目 38人 2日目 25人 ※両日参加者有）



ワークショップ参加者





Mission3

交わる

賑わいの創出

5 賑わいの創出：「交わる」

「子どもからお年寄りまで、みんなが集う広場」

買い物途中に立ち寄って休憩したり、子どもと遊んだり。
子どもからお年寄りまで気軽にくつろぎ交流できる場が欲しいという
声に応じて、大街道・銀天街という2つの商店街のちょうど真ん中あ
たりに「みんなのひろば」と「もぶるテラス」をつくりました。



5-1 みんなのひろば・もぶるテラスの運営

1. はじめに

2014年11月に松山市中心市街地賑わい再生社会実験の場として開設された「みんなのひろば」と、多目的スペース「もぶるテラス」が社会実験開始から約3年半を迎えた。

これまでアーバンデザインセンターでは、ひろばやテラスの管理とともに、賑わい創出のための様々なプログラムを実施してきたが、2017年度はターゲットを絞らず、テーマを設定して各種事業に取り組んだ。この1年の活動や課題を振り返る。

2. まちなかでの居場所の一つとしての定着化

実験開始から2018年3月末までの来場者は、みんなのひろばでは、延べ約180,000人（推計）（前年3月末：延べ約114,000人）、もぶるテラスでは、延べ約75,000人（前年3月末：延べ約48,000人）に達するなど、今年度も多くの方に利用してもらえる結果となった。

ひろばは、これまでどおり多くの親子連れや中・高校生、スーツを着たサラリーマン風の人々、お年寄りなど幅広い世代での利用が見られ、また、テラスも中・高校生によるひと時の語らい、OLの昼食、買い物途中の親子連れの休憩、備え付けのライブラリーを手にする人など、多様な人・

目的での利用がなされている。なじみの顔も一層増えるなど、ひろば・テラスがまちなかでの居場所の一つとして定着していることが伺える。

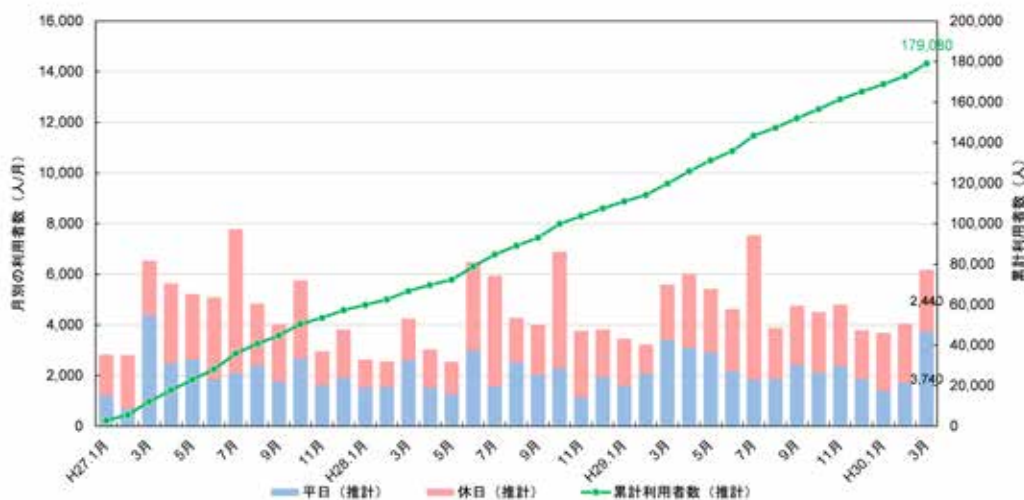
3. 今年度のコンセプト

2017年度は、「賑わい、交流、そして活動 ～人が集い、つながり、躍動する～」をコンセプトとして、22企画、全104回の主催・共催イベント（展示を含む）を実施した。昨年度末に立てた2017年度の計画をほぼ実行し、加えて新たな企画を展開した。

4. 新たなプログラムの展開

過年度実施して人気のあった「ハッピー絵本ライブ」（絵本の店“コッコ・サン”による絵本ライブ）、「もぶる鉄道部」（学生スタッフによる鉄道模型の展示）、「夏だ！海だ！あ、噴水だ！」（ひろばの噴水に水を溜めて遊ぶ納涼イベント）のほか、NPO法人ワークライフ・コラボとの共催「週末はまちなかで子育てをまなぶ」などを引き続き開催するとともに、「まちのがっこう」などの定期プログラムや、「星空散歩」など、新たな企画も立ち上げた。

図 みんなのひろば利用者数（推計）



（１）星空散歩

大学の天文部に所属する学生スタッフによる星空講座で、星について学び、ミニプラネタリウムづくりや星景写真の撮影方法を学んでもらうなど、座学と実践を組み合わせたプログラムである。

2017年4月の第1回開催に際しては、定員オーバーによりお断りを入れなくてはならないほどになり、参加できなかった親子連れからのリクエストにより追加開催を重ね、全4回に及ぶ人気企画となった。最終の第4回では、天の川が見える久万高原天体観測館にて反射望遠鏡で星を鑑賞するなど、親子の会話が増えるきっかけとなるような企画であった。

「星空散歩」を大人向けに発展させた「まちなかプラネタリウムカフェ」も企画・実施した。大学生や社会人など、これまでのプログラムとは異なる層の参加者が集まり、プラネタリウムを投影し、星座についての座学、星にまつわる音楽鑑賞などを行った。コーヒーやお菓子も星にまつわるものを準備し、参加者同士で星に関する思い出を語り合った。

（２）もぶるクリスマス

クリスマスイベントと、過年度に開催して好評を博した「レゴであそんで、まちづくり♪」、「もぶる鉄道部」とをコラボレーションさせたプログラムで、ひろば・もぶるテラスを同時に使用し、多くの親子連れの参加に繋がった。降雨により当初予定時間よりも早い終了となったものの、スタッフによるトーンチャイム演奏会も予定通り披露でき、賑やかな演出となった。開催中はアーバンデザインセンターのパネルも飾ったことから、多くの人が立ち止まって見ていくなど、アーバンデザインセンターの活動周知にもつながった。

（３）今むかしまちなか地図めぐり

子どもたちに、松山のまちなかを知ってもらうことを目的として、“てくるん”と共同開催したプログラムである。江戸・明治・大正時代の地図をもとに、松山のまちの特徴や変遷等について解説し、その後、昭和30年代の住宅地図を片手にまちを歩き、当初から今も残る店舗を探したり、商店街周辺でナゾ探しを行った。

地図に昔からある店舗に色を塗ったりし、終了後は、昔



星空散歩



もぶるクリスマス



今むかしまちなか地図めぐり

からあるものが今も残っていることに楽しみを感じたり、違いに驚いたり、自分たちが住んでいるまちに、より愛着と興味をもってもらう良い機会になったと思われる。

(4) もぶるんるん♪大人のボディメイク

全6回、3ヶ月にわたり、まちなかで朝活をしながら取り組むダイエット企画である。プロの指導のもと、取り組み方法のレクチャーやウォーキング・ヨガなどを実践した。

20代～50代の女性を中心であったが、男性の参加者も数名見られた。終了後、参加者からは「立ち姿勢が楽になった」、「少しだけ体重が減った」などのカラダの変化だけではなく、「日曜の朝を有効に活動できた」、「早起きが苦手だったが気持ちよく感じられるようになった」など、意識や習慣の変化も見られるなど、参加者全員が満足度の高い企画となった。

4. 学生スタッフの関り

自主事業のほとんどは、学生スタッフが中心となって企画・実施している。学生が関わることで、子どもたちはもちろん、親御さんとの交流を深めるものになり、プログラムが終了した後も、親子で遊びに訪れるようになるなど、

次に繋がる交流が生まれている。また、学生スタッフにとっても、プログラムの企画から準備、実施までの一連の過程を経験することで、多くの学びが得られている。

ひろばとテラスは、卒業により毎年スタッフの一部が入れ替わりつつも、学生がまちに滲み出す、市民と交流しながらまちづくりにも貢献する拠点として機能しているのではないだろうか。

5. 取り組みの成果

社会実験の効果検証や課題把握、今後のプログラム実施などの参考にすることを目的として、もぶるテラス、みんなのひろばでは継続的に調査やアンケート等を実施している。

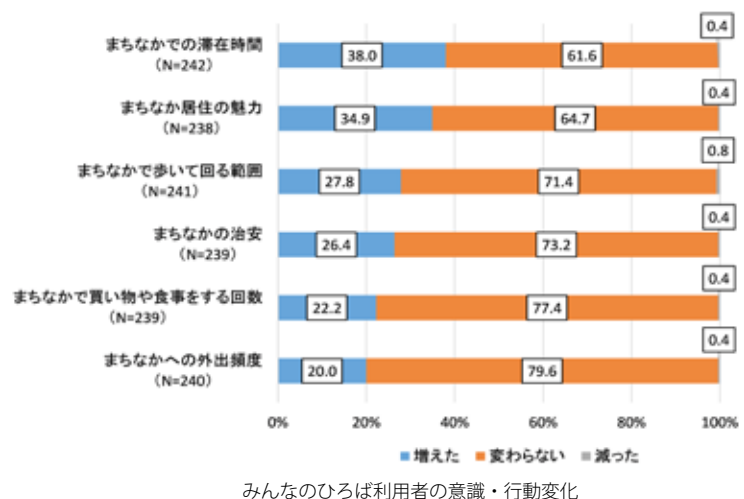
ひろば・テラス前面の歩行者通行量は、昨年度に比較して増加し、特に、休日では、1.5倍にまでなっている。

また、みんなのひろば利用者アンケートからは、「まちなかでの滞在時間」や、「まちなか居住の魅力」などが増えた人が3割以上いるなど、周辺への波及効果も確認された。

ひろばやテラスといった市民に開かれた場、またそこで展開している様々な取り組みは、全国的にも評価されるものとなってきた。日本のソト（屋外）空間の計画・運用ま



資料：もぶるテラス・みんなのひろば
利用者アンケート調査（H29.5～7）



での取り組み、使いこなしを対象として、平成 29 年 11 月に初めて開催された表彰プロジェクト『ソトノバ・アワード』において、「松山市中心市街地賑わい再生社会実験『みんなのひろば』」が市民の愛着を生む段階的場づくりが、日常風景へ好循環を生んだ点などが高く評価され、準大賞を受賞した。

6. 今後の課題

様々な効果が認められつつある一方で、まだまだ課題も多い。

（１）周知・集客の向上

ひろばやテラスの認知度も徐々に高まり、幅広い世代の利用者も見られるようになってきた。店舗アンケートでは、「シニア世代」向けのイベント等要望もあることから、ターゲット層を複数化し、昨年度の「子育て世代」に着目した取り組みから、多世代の交流が生まれるような仕組みづくり、シニア世代等にも届く情報発信のあり方の検討が引き続き必要である。

（２）自主事業に頼らない賑わい創出

ひろば・テラスでは多数のプログラムが開催されているが、その多くがアーバンデザインセンター主催のものになっており、限られたリソースの中で、現形態を維持させていくことには限界がある。

ひろばやテラスが市民にとって単に与えられた場としてではなく、自らが活用できる場、発信できる場として認識・活用してもらうことで賑わいを創出していくことが望ましい。

一方で、現時点ではひろば・テラスともに公共施設であることから、特定の民間による営利・営業活動の制限、周辺の同業種店舗への配慮などが必要となっている。お城下マルシェの実施・成功により、営利活動の実績もできたこ

とから、今後も引き続き、仕組みづくりについて議論を重ねることが必要である。

（３）商店街等との連携強化

周辺店舗へのアンケート結果によると、回答店舗の 2 割弱（20 店舗）がみんなのひろば・もぶるテラスの使用に関心があり、そのうち 13 店舗は使用について具体的なイメージを持っているとの回答が得られた。申し込み方法や手順をまとめたパンフレット等を提供するなど、積極的にアプローチしていくとともに、営利・営業活動の範囲について、より具体的な検討が必要となっている。

反面、まだまだ多くの店舗が関りを感じていないのも実態であることから、関心がない店舗の取り込み方法などについても検討していきたい。

（４）持続的な維持・管理の仕組みづくり

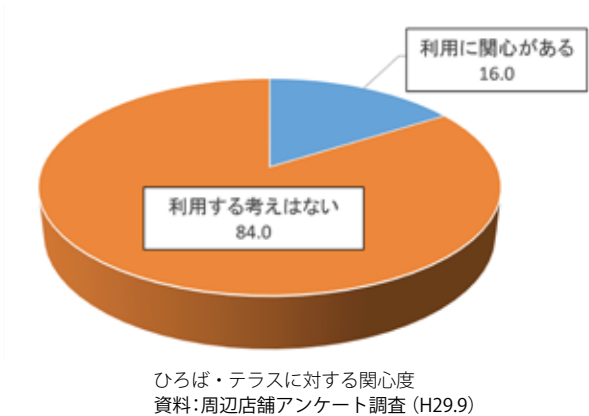
ひろば及びテラスは松山市の社会実験として開設されているものであり、管理・運営に係る費用も業務委託費という形で賄われている。社会実験である以上、持続化が担保されているものではないことから、自立化に向けた仕組みづくりが急務となっている。

（５）評価手法の確立

みんなのひろばの設えは、関係者と一般参加者によるワークショップを通じて検討がなされ、結果、土管や小高い丘などが設置された良質な空間が形成された。

周辺の環境条件と合わせて、どのような空間が利用者にとって快適なのか、立ち寄りやすいのかなど、実空間を通して様々な視点でデータを取得しておくことで、他箇所への展開時の貴重なデータになるものと思われる。また、利用者の活動において、ひろばやテラスがどのような役割を果たしているのか、アクティビティの中でどのように組み込まれているのかなど、空間評価、活動評価についても今

後検討することが必要だと考えている。



7. おわりに

2014 年 11 月から開始された社会実験は、多くの利用者からの継続要望の声が寄せられたこともあって、期間延長を重ね、今年度末で 3 年半を迎えた。

ひろばが駐車場であった頃の記憶はしだいに薄れ、ひろばが当たり前のようにそこにある景色に違和感を感じている人はほとんどいないのではないだろうか。また、立ち上げ当初にスタッフとして関わった学生の多くは卒業し、社会人としてそれぞれの道に進む姿を見るたびに時間の経過を実感するところである。

この 1 年を振り返りをまとめている最中、2018 年度の社会実験の継続実施が決定した。

与えられた次の 1 年、様々な人の力を借りながら、残された課題の解決に向けて関係者が一体となって取り組んでいきたい。

実施プログラム一覧

実施日	イベント名
4.14	産経新聞ミュージアムカフェ
4.16	お城下マルシェ
4.19	ハッピー絵本ライブ
4.22	星空散歩
5.01-10.31	ヘチマのグリーンカーテン
5.01	ハッピー絵本ライブ
5.21	お城下マルシェ
5.22	もぶるんるん♪オトナのダイエット
5.24	大人の絵本講座
6.04	もぶるんるん♪オトナのダイエット
6.07	ハッピー絵本ライブ
6.11	もぶるんるん♪オトナのダイエット
6.15	モバイル屋台「もぶるドリンク開発ワークショップ」
6.18	お城下マルシェ
6.21	大人の絵本講座
6.24	MOBURU LIVE STUDIO
6.24	夏だ！海だ！あ、噴水だ！
6.25	もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.01	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
7.01	星空散歩
7.01	モバイル屋台「土曜夜市」出店
7.02	たけちゃんの Art Craft 教室
7.07	産経新聞ミュージアムカフェ
7.08	たけちゃんの ArtCraft 教室
7.08	モバイル屋台「土曜夜市」出店
7.09	MOBURU LIVE STUDIO
7.12	ハッピー絵本ライブ
7.15	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.16	もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.16	星空散歩
7.22	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.23	夏の宿題お助け隊
7.25	もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.26	夏の宿題お助け隊
7.26	大人の絵本講座
7.29	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.31	夏の宿題お助け隊
8.01	道後村まつり「椿のおもてなしプロジェクト」
8.02	夏の宿題お助け隊
8.05	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
8.05	星空散歩
8.06	夏の宿題お助け隊

実施日	イベント名
8.09	夏の宿題お助け隊
8.09	ハッピー絵本ライブ
8.12	もぶる鉄道部「しこくれっしゃ大集合！」
8.13	夏の宿題お助け隊
8.19 8.20	夏だ！海だ！あ、噴水だ！
8.21	今むかしまちなか地図めぐり
8.23	本から学ぶまつやま
8.23	大人の絵本講座
8.24	夏だ！海だ！あ、噴水だ！
9.01	マドンナからの手紙
9.02	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
9.06	ハッピー絵本ライブ
9.27	大人の絵本講座
9.29	産経新聞ミュージアムカフェ
10.11	ハッピー絵本ライブ
10.14	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
10.25	大人の絵本講座
10.28 10.29	チェキと、仮装と、こんですと
11.05	もぶるんるん♪大人のボディメイク
11.08	ハッピー絵本ライブ
11.15	大人の絵本講座
11.23	くつしたまいれ
11.24	星空散歩
11.26	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.02	星空散歩×もぶる工作教室
12.06	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.13	ハッピー絵本ライブ
12.14	大人の絵本講座
12.16- 12.25	まちなかてくてくクリスマス
12.20	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.24	もぶるクリスマス・ もぶる鉄道部「しこくれっしゃ大集合！」
12.24	モバイル屋台プロジェクト「MOBURU CHRISTMAS」
1.10	ハッピー絵本ライブ
1.12	産経新聞ミュージアムカフェ
1.14	もぶるんるん♪大人のボディメイク
1.26	大人の絵本講座
1.28	もぶるんるん♪大人のボディメイク
1.28	いい椿の日イベント
2.05	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.11	もぶるんるん♪大人のボディメイク

実施日	イベント名
2.14	ハッピー絵本ライブ
2.19	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.25	もぶるんるん♪大人のボディメイク
2.26	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.28	大人の絵本講座
3.04	もぶるんるん♪大人のボディメイク
3.05	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
3.14	ハッピー絵本ライブ
3.18	お城下マルシェ
3.19	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
3.24	まちのがっこう
3.27	まちのがっこう
3.30	まちのがっこう
3.31	まちのがっこう





6 情報発信：「知る」

「松山のまちづくりの情報発信はここから」

まちの今を皆さんにお知らせすることは大切な役割のひとつ。
UDCM がいま行っている活動やまちの動きを発信しています。



6-1 まちなかマガジン「もぶる」

UDCM 及びまちなかの情報発信、行政情報の発信を行うため編集ワークショップを昨年開催し、紙面づくりの基礎を学び、文章の書き方や写真の撮り方、キャッチコピーの付け方などを学んだ。その参加者の中から、ボランティアで編集スタッフを募り、市民による市民のためのフリーペーパー「まちなかマガジン【もぶる】」を発刊した。

今年度は、四半期に一度の発行であるが、新たなメンバーも加え、昨年の 2,000 部から 4 号、5 号は 5,000 部、6 号、7 号は 10,000 部と大幅に増刷した。配布場所は、松山市役所、支所、コミセン、コムズなどの市の主要施設や、FM 愛媛、まちづくり松山、取材協力先等である。

また、FM 愛媛の番組「まち@ラヂ」とも連動しアーバンデザインセンターで実施している事業等を発信しているが、更なる情報発信に努めたいと考えており、他の雑誌とは違った魅力を持ち、多くの市民に読んでもらえるような「まちなか新聞」にしたいと考えている。

もぶる編集部員は、取材、写真撮影、デザイン検討など紙面づくりのプロセスを通じて、参加者相互の交流促進、

紙面づくりのスキルアップ、文章力の向上、コミュニケーション能力の向上を図りながらよりスキルの高い紙面づくりを目指している。



編集ワークショップの募集チラシ



ワークショップの様子



市長との対談

4号

1. 漱石さんが食べた団子
2. 市民ランナー入門
3. りんりんの「まちなかアート」めぐり
4. ロミオのプチ花束
5. バック・トゥ・ザ・坂の上の雲ミュージアム
6. 東日本大震災復興記念コンサートレポート
7. UDSM スクール 3 期生募集
8. ライブレポート
9. 編集後記

5号

1. 今回のモブルガール
2. 文房具の旅人
3. 市民ランナー入門
4. ハンモックで楽しむ
5. 横河原ぷらっと HOME
6. りんりんの「まちなかアート」めぐり
7. ひみつの花園町通り
8. 坂の上の雲フィールドミュージアム通信
9. 編集後記

6号

1. 「坂本屋で」で瓦洗い
2. もぶるマラソン部
3. 読んでみんけん「坊っちゃん」
4. 市民 50 人が声優に挑戦
5. りんりんの「まちなかアート」めぐり
6. 藤田晴彦の音、食、美、夢、人、巡り
7. 移動する建築
8. 坂の上の雲フィールドミュージアム通信
9. 編集後記

7号

1. 今回のモブルガール
2. 文房具の旅人
3. 市民ランナー入門
4. FM 愛媛「カモ☆れでい★Night」
5. りんりんの「まちなかアート」めぐり
6. 読んでみんけん「夢十夜」
7. 移動する建築
8. 坂の上の雲フィールドミュージアム通信
9. 編集後記



6-2 FM 愛媛「まちラヂ」

FM 愛媛の協力により運営するラジオ番組「まち@ラヂ」（毎週水曜 11:40-11:55 放送）では、UDCM が関わるプロジェクトやイベントの紹介、まちづくりの担い手へのインタビュー、街なか情報を継続して発信している。また、毎月一回、野志市長に出演いただき、タウンミーティングの参加者をゲストに招いて各地域の取り組みについてお話を伺っている。

今年度は、12 月より放送プログラムの見直しを行い、より一般リスナーへ興味を持ってもらえるよう「ペコラン」という新コーナーを立ち上げた。これはまちなかでおすすめのランチを紹介する小さなコーナーであり、ランチを機にまちへ出るきっかけとなることをねらっている。また、まちなかの歴史を紐解く連続企画を新設するなど、よ

り多角的に松山の魅力を放送できるよう工夫をしている。

番組の運営は、例年に引き続いて「まち@ラヂ」アナウンス部を中心に市民が企画、取材、収録に携わる体制をとっており、活発な活動が継続している。



平成 29 年度の放送内容一覧

放送回	放送日	放送内容
第 104 回	2017.4.5	野志市長インタビュー Part 11 - 桑原地区タウンミーティング -
第 105 回	2017.4.12	まちいく学生スタッフ企画 - 星空散歩 -
第 106 回	2017.4.19	移住コンシェルジュが行く！第 2 弾 - 川崎暁子さんにインタビュー -
第 107 回	2017.4.26	俳優・声優の森一馬さんにインタビュー
第 108 回	2017.5.3	野志市長インタビュー Part 12 - 堀江地区タウンミーティング -
第 109 回	2017.5.10	海上自衛隊の練習艦「しまゆき」
第 110 回	2017.5.17	まちいく学生スタッフ企画 - もぶるんるん♪オトナのダイエット -
第 111 回	2017.5.24	銀天街まちなか空間活用実験
第 112 回	2017.5.31	MOBURU マガジン連携企画 - 土佐礼子さんにインタビュー -
第 113 回	2017.6.7	野志市長インタビュー Part 13 - 福祉ボランティアタウンミーティング・シルバータウンミーティング -
第 114 回	2017.6.14	松山アーバンデザインセンターの新スタッフ紹介 - 柳原シニアディレクター -
第 115 回	2017.6.21	まちいく学生スタッフ企画 - もぶるライブ Studio -
第 116 回	2017.6.28	移住コンシェルジュが行く！第 3 弾 - 大塚ジャスマンさんにインタビュー -
第 117 回	2017.7.5	野志市長インタビュー Part 14 - 笑顔のまつやまわがまち工房 -
第 118 回	2017.7.12	松山アーバンデザインセンターの新スタッフ紹介 - 尾崎ディレクター -
第 119 回	2017.7.19	まちをつくる仕事人 - 松山市役所吉田英生さんにインタビュー -
第 120 回	2017.7.26	今むかし まちなか地図めぐり
第 121 回	2017.8.2	野志市長インタビュー Part 15 - 北条地区タウンミーティング -
第 122 回	2017.8.9	まちいく学生スタッフ企画 - しこくれっしゅ大集合！～N ゲージの世界～ -
第 123 回	2017.8.16	移住コンシェルジュが行く！第 4 弾 - 藤岡慶太さんにインタビュー -
第 124 回	2017.8.23	「移動する建築」都市設計コンペ
第 125 回	2017.8.30	「みんなのヒミツ基地」まちづくりアイデア募集
第 126 回	2017.9.6	野志市長インタビュー Part 16 - 三津浜地区タウンミーティング -
第 127 回	2017.9.13	今治のまちづくり ～宇高美幸さんにインタビュー～
第 128 回	2017.9.20	まちなかマガジン「もぶる」5号発行
第 129 回	2017.9.27	えいご Café-Sherry さんにインタビュー -
第 130 回	2017.10.4	野志市長インタビュー Part 17 - 雄郡地区タウンミーティング -

放送回	放送日	放送内容
第 131 回	2017.10.11	アーバンデザインスクール 3 期生の取り組み～公園まちづくり@松山～
第 132 回	2017.10.18	移住コンシェルジュの板垣義男さんにインタビュー Vol.1
第 133 回	2017.10.25	移住コンシェルジュの板垣義男さんにインタビュー Vol.2
第 134 回	2017.11.1	野志市長インタビュー Part 18 - 愛媛学園タウンミーティング -
第 135 回	2017.11.8	アーバンデザインスクール 3 期生の取り組み～萱町クラブ～
第 136 回	2017.11.15	アーバンデザインスクール 3 期生の取り組み～NEXUS～
第 137 回	2017.11.22	アーバンデザインスクール 3 期生の取り組み～伊予絃でハンドメイド体験～
第 138 回	2017.11.29	アーバンデザインスクール 3 期生の取り組み～まつトラムラリー～
第 139 回	2017.12.06	野志市長インタビュー Part 19 - 久米地区タウンミーティング -
第 140 回	2017.12.13	日本語町内会
第 141 回	2017.12.20	移動する建築 Part1
第 142 回	2017.12.27	移動する建築 Part2
第 143 回	2018.01.10	松山の場所（まちなかの歴史：松本館長）
第 144 回	2018.01.17	松山の人にインタビュー（どうごや：清水久嗣）
第 145 回	2018.01.24	UDCM 情報（UDCM：尾崎信）
第 146 回	2018.01.31	ペコランボイスリレー
第 147 回	2018.02.14	松山の場所（札の辻から毘沙門坂までの歴史：松本館長）
第 148 回	2018.02.21	松山の人にインタビュー（いよこころザシ大学：泉谷昇）
第 149 回	2018.02.28	UDCM 情報（UDCM：尾崎信）
第 150 回	2018.03.14	松山の場所（坂の上の雲ミュージアム付近：松本館長）
第 151 回	2018.03.21	松山の人にインタビュー（版画家：高橋基）
第 152 回	2018.03.28	UDCM 情報（UDCM：柳原卓）

6-3 松山アーバンデザインセンターフォーラム

平成 26 年の U D C M 開設から 4 年間が経過したことを受け、これまでの U D C M の活動を振り返り、またその成果を広く市民へ周知し、U D C M の市民認知度を高めファンを増やすことを目的とした「松山アーバンデザインセンターフォーラム」を開催した。

開催日は、3 月 18 日。「移動する建築」のお披露目会場（花園町通り・飛鳥乃湯泉中庭）へ展示パネルを設置するとともに、同日にもぶるテラスにてトークイベントを開催した。なお、パネルはその後にもぶるテラスにて常設展示している。

トークイベントの登壇者は、南雲勝志（ナグモデザイン事務所）、白石卓央（瀬戸内アーキテクチャーネットワーク）、羽藤英二（U D C M センター長）の三者であり、進行はディレクターの尾崎が務めた。トークイベントでは、次の四つの論点を中心に議論が展開し、今後の U D C M 運営にとって貴重な示唆を得た。

（1）U D C M 事業では、地域住民・職人・組織との協働プロセスを通じた「人づくり」が評価できる

・「移動する建築」は、花園町通りも道後飛鳥乃湯泉も、半年間ほどかけて十分に話し合ってきたからこそ、思いの伝わるものができていた。（南雲）

・関わってきた人の協働の力と技術力があったからこそ、思いやアイデアが伝わるまでの完成度の高いものができていたと感じた。（南雲）

・とても精度が高いものができていた。その裏には伊予匠ノ会の方の支援があり、自分たちで作ったんだという誇りやプライドにつながっていた点がよかったのではないかと。（白石）

・デザインは、そこに住む人への提案である。住む人が何を考えていて、その人たちになにを答えるかというシンプルな考え方を持つことが大事。今回の移動する建築も、花園・道後の人たちがいい

デザインだと思わなければ、ふさわしいデザインとは言えない。（南雲）

・花園の屋台も、予算が潤沢でなかったために、様々な知恵を絞って地元の力を借りて作ることができていた。やっぱり人の力が大事であった。伊予匠ノ会の方が彗星のごとく現れてくれたのも、松山のいい密度間があったからこそ出会えたのかもしれない。（南雲）

・伊予匠ノ会の方は、職人なので今までまちづくりに携わる機会はなかったと言っていた。今回 WS に出て、新たな機会が得られたと感じたとも。彼らも地域のために何かしたい、力になりたいというような地域愛着を強く持っている。（尾崎）

（2）魅力的な「点」をつなぐことで松山の魅力を体験できるようにしていくべきである

・松山の人は個性的というわけではない。災害もなく、温暖で、問題意識もあまりないイメージ。今回、地元の人がものづくりに参加して子ども達もかわっていくような動きができて、それが松山全体で繋がっていくのが理想的だと思う。最近、松山の核の部分の魅力化が進んできたので、その核と核の間で連鎖させていくとまちがおもしろくなるのでは。（羽藤）

・松山はちょうどいい密度感。花園のマルシェでは知っている人がお店を出していて、道後では匠の会の知り合いに会うなど、どこに行っても知り合いがいるような。（白石）

（3）そのために、松山というまちの「読み方」の掘り起こしと共有が重要である

・はじめて松山を訪れたのは 15 年前ほど。松山城には驚いた。石垣・金具などすべてが美しいプロポーション。ものづくりの目標とするべき建築物

だと思う。地元の人からすると松山城は当たり前にあるのもかもしれないが。道後温泉本館や路面電車などにも、松山人としてのプライドを感じる。根源は松山城にあるのでは。(南雲)

- ・わたしも松山城はすばらしいと思う。城山公園の施設が移転して、公園内の賑わいはなくなったがお城が見えるようになった。重信川や松山城、湯築城など、さまざまな歴史の痕跡を残す場所や軸線がある。これらをどう読むか、という「松山の読み方」をみんなで解釈し、それらを込めたデザインをしていく必要がある。(羽藤)

- ・松山の読み方を考えたとき、松山城から考えるとわかりやすく、それが共通のデザインの基盤になっていくと思う。(羽藤)

- ・道後は本館に縛られているようだ。未来に向かう上で、松山城は残さないといけないけれども、もう少し他のデザインには自由度があっても良いのかもしれない。そう考えると、花園町通りはおもしろいと思う。今までの松山の価値観とは離れて、あらたに歩みだした感じがする。(南雲)

- ・基本となる都市の読み方や回遊の仕方の軸というものはあるはずだが、それも花園町通りでは忘れられていた。もう一度、高齢化などの流れもくみ取って、昭和からの流れをくみ取る仕立て方以外にも、新たな仕立て方を考えていく必要があるのではないか。(羽藤)

(4) かつての在郷村の豊かな暮らしの再生によりコンパクトシティの質が上がるのではないか

- ・三津浜では、若者が自分たちで商売を始めていて、また感度も良く、考え方や能力をまちなかに落とし込むことができないかと考えることがある。今行われているのは、市などの都市コンサルの範囲

で行われている部分が大いと思う。松山からデザインするという面から見て、土着の部分から生まれてくるデザインをどのように拾い上げていくのかが自分の課題でもある。(白石)

- ・JR 松山駅から道後の範囲を松山のまちと捉えがちだが、その外に在郷、旧のむらが存在している。久米村・予土村などがあり、いい神社や温泉、水路、公民館、自然がある。また、人も多く住んでいるのも事実。ただ、高齢化が進んでいるため、暮らしをどう変えていくかが課題。白石さんが入れている三津浜も歴史が深いと思うが、久米にも日本酒をつくられている人がいたり、余戸には道後村で村長されている人がいたり。そういうところの地の生活をもう一段掘り起こしていくことで暮らしが楽しくなるのでは。(羽藤)

- ・その基盤になるのは、地域の学校だったりするので、まちの資源の教育、まちあるきといった教育に対して、UDCM も関わって展開していくと、地のデザイナーが関わるような新しい活動につながっていくのでは。(羽藤)

- ・まちなかに関してはこれからどうするのか、白石さんから意見があまりでなかったように、次の一手が、民間が活発になって行すべきか、公共がお金を出して進めていくべきか、PPP といった新しい方法で行っていくのか、決めていかなければならない。(羽藤)

- ・経済について、いくら金を稼げたとしてもしかたないこともある。松山の知人は、お父さんが高齢でみかん畑の世話ができなくなり、畑を毎年削っているという話をしていた。愛媛の資源であるはずだが、現実ではその価値をなくしている。地域の力を考えたときに、今までつなげてきたものがあるにもかかわらず、ちょっと油断しただけでな

くなっていってしまうということと、まちなかの歴史や資源のことをリンクさせていかなければならない。そういうところを白石さんたちにつなげていってほしいと思う。(南雲)

・まちなかは城下町。周辺の農村から物資が届いて市場が行われて華やかに賑わうということが、何百年も積み重ねられてきた。周辺の暮らしの豊かさあつての賑わいだと思う。そして、まちなかの賑わいがありきたりな既製品でできているのではなく、地元の入魂されたもので作られていくと松山が変わっていくと思う。(羽藤)

・そのような空間でお茶したり、教育を行ったり、そこの本棚にはそれぞれの村の歴史の本があつて、おじいちゃんもいて伝承されていくような。といった郊外のまちづくりをやっていきたい。三津浜も派手ではあるが、もっと村の暮らしの豊かさのデザインがなされるようになると、松山という名前を使わずに、久米村、予土村といったもっとロー

カルな地名で松山の計画を語れるようになった時に、強い資源を手に入れることができるのではないと思う。そういうのが次のチャレンジなのかもしれない。(羽藤)



フォーラムの様子

7 UDCM の事業改善及び重点課題について

行政分野の評価に用いられる「ロジックモデル」を活用し、UDCM の実施プログラムのロジックモデルを作成すると共に、今後の事業改善の方向性や重点課題について検討した。UDCM スタッフとのヒアリングや報告書に基づいて、8つのプログラム（「ビジョン」「研究会」「デザインマネジメント」「市民コンペ」「情報発信」「学び」「テラス・ひろば運営」「その他」）が3つの最終アウトカム（「松山に根差したまちづくり体制の形成」「松山ならではの都

市空間の創出」「松山の市民力の向上」）につながるロジックモデルを作成した（次頁参照）。その上で、関係者（UDCM スタッフ、学識者、松山市など）との協議を行い、UDCM の事業改善の方向性や重点課題について検討した。その結果、以下の表に示す意見が抽出された。

1) プログラムの優先度

テーマ	意見
【全体】	・UDCM スタッフの実際の労力・効果を考慮すると、ロジックモデルの下の方（市民力の向上）に比重が置かれているように感じる。UDCM としてまちをデザインする上では将来的には「まちづくり体制の形成」に機能が移るべきではないだろうか。
【ビジョン】	・まちを作り上げるには10年20年かかる。長期的なところを見据えて、早々に「ビジョン」に手を加えなければ間に合わない。ビジョンに向けた具体的な事業化までの計画を立てる役割を重視すべきであろう。
【デザインマネジメント】	・総合的なまちづくりは一番にやるべき課題である。
【デザインマネジメント】	・観光客に喜ばれ、地元の人たちが住んでよかったと思ってもらえるような魅力的なまちを目指すために、「デザインマネジメント」は重要な課題である。

2) 役割分担の見直し

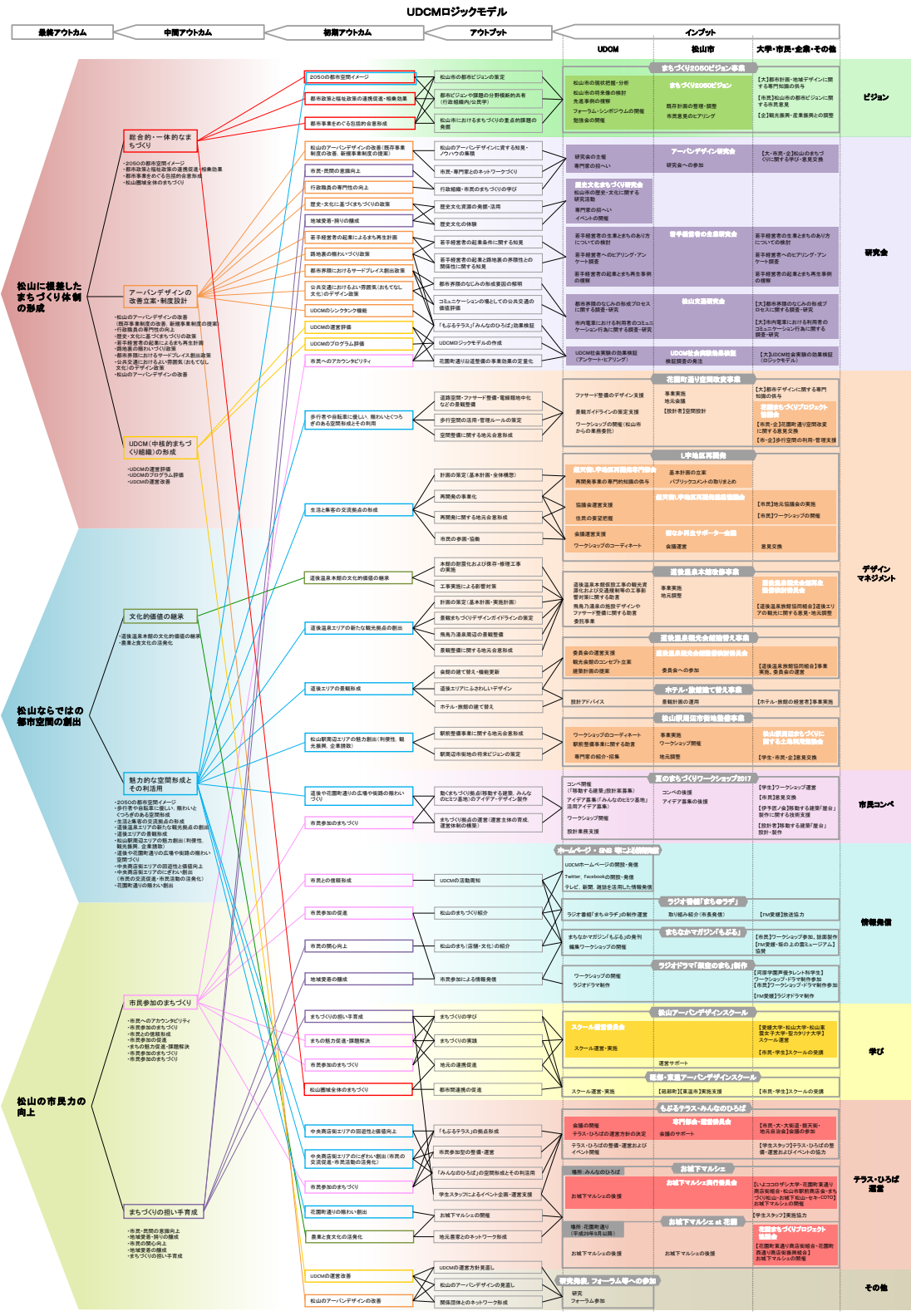
テーマ	意見
【全体】	・「スクール」「市民コンペ」「情報発信」は新たな主体を作って、そこに任せる方向を考えるのも大事ではないか。
【情報発信】	・手を広げすぎているように感じる。「まち@ラヂ」「もぶる」「架空のまち」は新たな主体を作って活動を任せてはどうだろうか。
【人材育成】	・「スクール」はUDCM としての負担が少なくない。民間・NPO・その他団体に任せられるところは任せることが大事である。
【拠点運営】	・可能なら運営は民間に任せることも検討してはどうだろうか。
【拠点運営】	・テラスの運営を別の主体に任せることも重要な課題である。

3) 関係主体の連携

テーマ	意見
【ビジョン】	・松山市以外の組織との連携が弱いように感じる。民間企業が参加する余地が多く残されている。
【研究会】	・専門家の知識が必要だと思うが、大学との連携が十分ではない。また、市民・商店街・企業などを巻き込めていないのではないかと。将来的には民間とも連携して、知見や課題を共有しながらビジョンを作り上げることが重要。
【デザインマネジメント】	・参加者は市民・学生・企業などもっと幅広くあるべきではないか。
【デザインマネジメント】	・研究会間の連携を図り、成果を共有することが必要である。
【デザインマネジメント】	・行政と地元の中間的な立場として大学が積極的に加わるべきだと感じる。
【市民コンペ】	・行政や地元の関心を高めることが大事。
【市民コンペ】	・一般の人の参加を促進することが重要である。
【市民コンペ】	・地元全体との連携が必要である。
【人材育成】	・スクールをそれぞれの自治体で個別に実施していて都市間の連携がとれていない。
【人材育成】	・スクールに市職員や民間企業も参加してほしい。スクール運営委員の4大学の連携がとれていない。

4) 新しいプログラム提案

テーマ	意見
【ビジョン】	・初期アウトカム「2050の都市空間イメージ」イメージだけでなく、時系列的なロードマップが必要。
【情報発信】	・まちなかマガジン「もぶる」で行っているワークショップの代わりに、「ホームページ・SNS等による情報発信」でワークショップを開催する。
【人材育成】	・地元根づいたまちづくりの担い手を育成するために高校生を対象にしたらいののではないかと。
【人材育成】	・受講生のスクール卒業後を考え、どのようなまちづくり関連の仕事に就くことを見据えて育成しているのかを明確にするべき。
【人材育成】	・アーバンデザインスクール卒業後もUDCM に携わってもらえるようにしたい。
【拠点運営】	・大学生に対して授業の一環としてテラス・ひろばの運営に加わってもらいたいのではないかと。
【拠点運営】	・お城下マルシェにスタッフとして学生を呼んで、まちづくりへの参加を促進できたらよい。
【その他】	・研究会・フォーラムに参加する側ではなく、開催する側になるべき。



8 おわりに

UDCM 副センター長 松村 暢彦

4年目を迎えたUDCMは、新たなメンバー（柳原卓、尾崎信）を加えて、より一層、活動やステークホルダーの範囲が大きく広がった。

まず、UDCMの役割の一つ「学ぶ」については、松山市に加えて、東温市、砥部町でアーバンデザインスクールが開催された。今年のスクールでは、味酒地区まちづくり協議会と連携してイベントを行うなど地域との協働による取り組みをより一層進めることができた。スクール生が提案した市内電車を使ったラリーイベントのしくみが松山市の婚活イベントに活用されたり、城山公園でのピクニックイベントを契機に公園内の店舗でのレジャーシーツの貸出につながったりするなど、スクール生の提案が他の主体へ波及させることができた。徐々にではあるが、スクールの成果が粋を飛び出して実社会に浸透しつつあるといえよう。

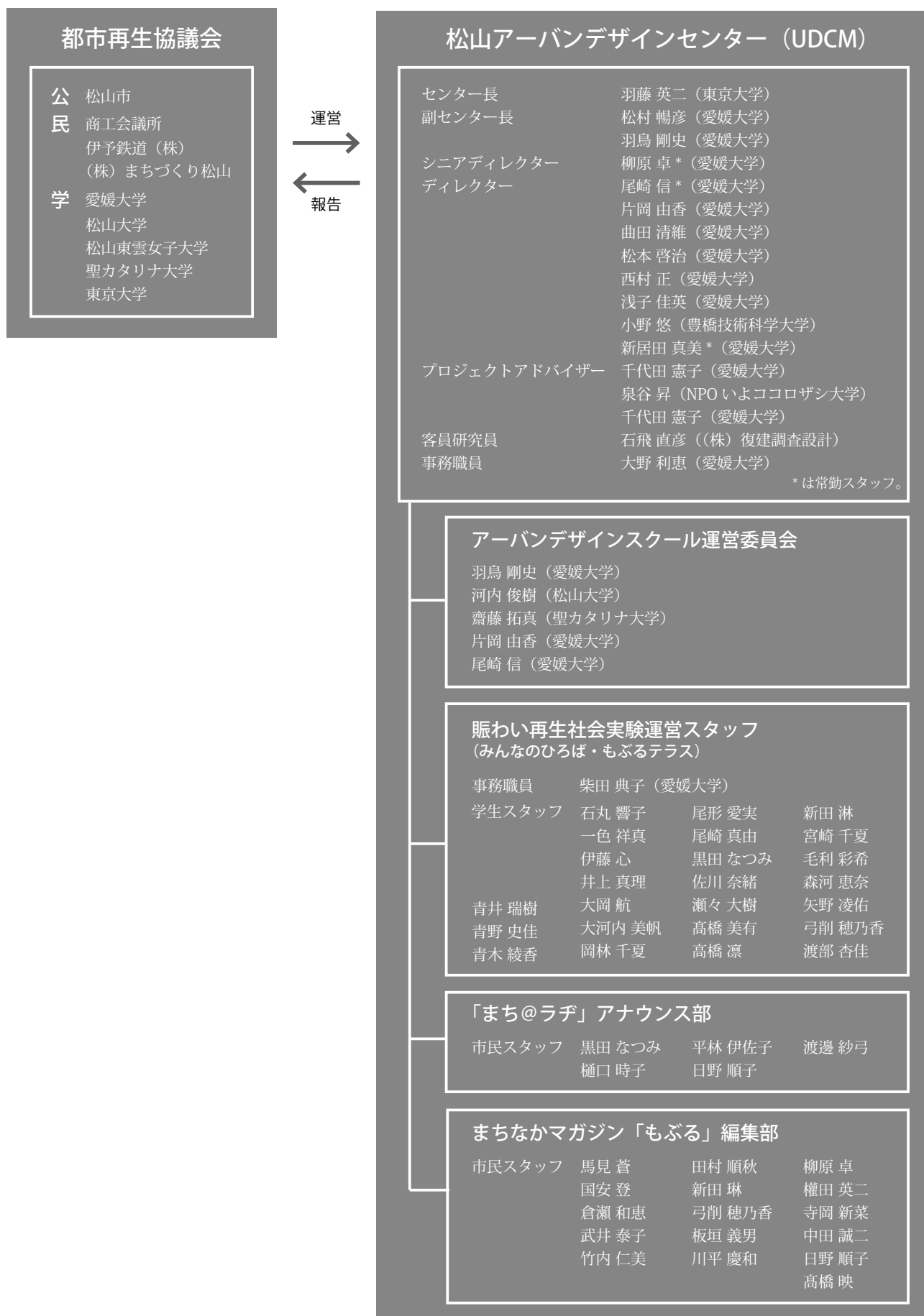
また、今年度はえひめ国体の開催もあり、道後温泉地区で「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉」がオープンし「花園町通り」のリニューアル整備が完成するなど、まちなかの空間のクオリティが大きく向上した。UDCMでもこれらの地区の計画プロセスを通して空間を「つくる」役割を果たしてきたが、これとあわせて「育てる」観点から空間デザインマネジメントに取り組んだ。具体的には、両地区を舞台とした「移動する建築」都市設計コンペと「みんなのヒミツ基地」まちづくりアイデアを募集し、「まちを旅する4つの屋台」と「街の中の雲」という移動する建築を市民と一緒にワークショップを繰り返して形にすることができた。作品を作り上げるなかで生まれた新たな方々との繋がりを今後の活動にいかしていきたい。銀天街L字地区再開発も具体化に向けてうごくなか、街なか再生サポーター会議を開催し、再開発に向けてオープンな議論を積み重ねることができた。

「みんなの広場・もぶるテラス」は、年々利活用が拡大しており、お昼時には弁当を広げる方々、夕方には高校生

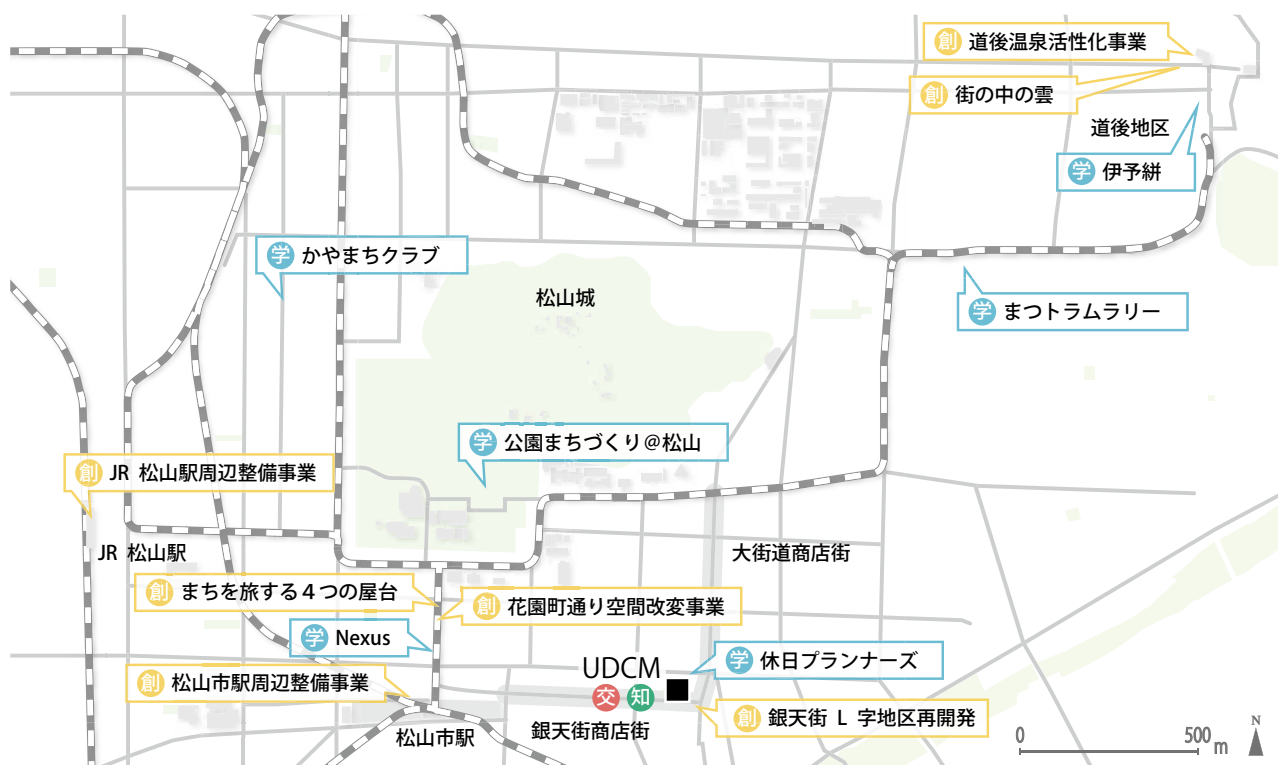
が立ち寄って宿題をする姿など市民の大切な居場所として定着している。今年は子育てサポートをテーマに活動を増やしていくことで、新たな需要を増やしていくことができた。

松山市の中心市街地の活性化は、依然として継続的課題であるし、道後温泉はいよいよ改修のステップに入っている。ひと育ても含め、公民学の連携のもとに、着実な成果を目指して活動・研究を進めていきたい。

UDCM 運営体制



活動フィールド



受賞・論文一覧

雑誌論文等

- 曲田清維：暮らしとまちの再生，日本家政学会誌 Vol.68, No.10, pp.554-558, 2017
- 小野悠，片岡由香，羽鳥剛史，羽藤英二：「Urban Design Center for Public-Private-Academic Collaboration: The Case of Urban Design Center Matsuyama」，International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2017
- 小野悠，片岡由香，羽鳥剛史，河内俊樹：「The Urban Design School in Matsuyama City: A Case Study of Experiential Learning and Community Collaboration」，International Congress of Asian Planning Schools Association 2017
- 羽鳥剛史：地域の存続を巡る存在論的不安に関する研究，実践政策学，Vol.3, No.2, 2017, 159-172
- 片岡由香，尾形愛美，羽鳥剛史：愛媛大学生の街中サードプレイスに関する実態調査，愛媛大学社会共創学部紀要，Vol.1-2, 2017, 9-14
- 羽鳥剛史，佐藤桂子：広域的放置駐輪問題を対象としたコミュニケーション施策の効果検証：松山市中心市街地における実践事例，愛媛大学社会共創学部紀要，Vol.1-1, 2017, 43-50

講演，口頭発表等

- 柳原捷吾，羽鳥剛史：地域文化の真正性と地域学習に関する実践研究-新玉小学校を対象とした現代の『散策集』編纂の取り組み-，論文発表，平成 29 年度土木学会四国支部技術研究発表会，5/20@ 愛媛大学
- 尾崎信：「APS 推進会議 都市+デザインフォーラム」，講演，『（公財）都市づくりパブリックデザインセンター』，5/25 @ 東京，丸の内 3 × 3 ラボフューチャー
- 小野悠：「松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくり」，活動報告，『平成 29 年度中心市街地まちづくり研究会』，8/23 @ 松山
- Haruka ONO：Urban Design Center for Public-Private-Academic Collaboration, The Case of Urban Design Center Matsuyama, Proceedings of 2017 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies, 8/25@Nagoya
- 小野悠：「まちづくりの担い手育成プログラムの実践と展開 - 松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくり -」，講演，『情報交流シンポジウム』 8/30 @ 広島経済大学
- 小野悠：「松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくり - 設立から 3 年間の成果と今後の課題 -」，論文発表，日本建築学会大会（中国）学術講演会，8/31@ 広島工業大学
- 尾崎信：「中心市街地・既成市街地における UDC とエリマネジメント」，活動報告，『udc 会議』，10/5@ 千葉県柏市パレット柏
- Haruka ONO：The Urban Design School in Matsuyama City: A Case Study of Experiential Learning and Community Collaboration, 14th International Congress of Asian Planning Schools Association, 10/13@ Beijing
- 尾崎信：「松山アーバンデザインセンターと中心市街地のまちづくり」，講演，『日本都市計画学会中国四国支部 支部間・支部内研究交流事業』，12/4 @ 徳島大学
- 小野悠：「アーバンデザインセンターの挑戦」，『東京大学都市工学科まちづくり大学院特別セミナー』，12/7@ 東京大学
- 尾崎信：「松山市の中心市街地の活性化を語り合う - 大街道・銀天街周辺の場合 -」，コーディネーター，愛媛大学 COC 公開講座 in 松山市，1/23 @ 愛媛大学

活動一覧

運営など	
4.04	第9回都市再生協議会
4.26	第28回社会実験運営委員会
5.09	第25回UDCM運営会議
5.18	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
5.21	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
5.31	第29回社会実験運営委員会
6.06	第26回UDCM運営会議
6.28	第30回社会実験運営委員会
7.13	第27回UDCM運営会議
7.16	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
7.16	東温市北方地区・医王寺「十七夜」視察
7.20	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
7.26	第31回社会実験運営委員会
8.25	International Conference of Asian-Pacific Planning「Urban Design Center for Public-Private-Academic Collaboration The Case of Urban Design Center Matsuyama」)
8.30	第32回社会実験運営委員会
8.30	情報交流シンポジウム（広島、小野講演「まちづくりの担い手育成プログラムの実践と展開～松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくり～」）
08.31-09.03	日本建築学会大会（中国）学術講演会（広島、小野論文発表「松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくりー設立から5年間の成果と今後の課題ー」）
9.08	松山市中心市街地歩行滞在者密度調査
09.08-09	全国まちなか広場研究会参加・視察（大阪）
9.17	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
9.18	松山市中心市街地歩行滞在者密度調査
9.20	第28回UDCM運営会議
9.21	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
9.23	「花園町通り」リニューアル記念式典
9.27	第33回社会実験運営委員会
10.05	第5回 udc 会議 in 柏（千葉、尾崎活動報告「UDCM」・パネルディスカッション「中心市街地・既成市街地におけるUDCとエリアマネジメント」）
10.12-13	International Congress of Asian Planning Schools Association（北京、小野論文発表「The Urban Design School in Matsuyama City A Case Study of Experiential Learning and Community Collaboration」）
10.25	第34回社会実験運営委員会
11.06	第29回UDCM運営会議
11.16	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
11.19	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
11.29	第35回社会実験運営委員会
12.04	日本都市計画学会中国四国支部
12.05	神山町視察
12.06	「松山市美しい街並と賑わい創出事業」（三津浜地区視察）
12.21	第30回UDCM運営会議
12.27	第36回社会実験運営委員会
1.18	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
1.21	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
1.23	愛媛大学COC公開講座 in 松山市（松山、かやまクラブ・公園まちづくり@松山・お城下マルシェ活動報告プレゼンテーション、尾崎パネルディスカッションコーディネーター「松山市の中心市街地の活性化を語り合う～大街道・銀天街周辺の場合～」）
1.29	第31回UDCM運営会議
1.31	第37回社会実験運営委員会
2.28	第38回社会実験運営委員会
3.07	第32回UDCM運営会議
3.15	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
3.18	UDCM 出入口協通行量・交通量調査
3.28	第39回社会実験運営委員会

創る	
4.24	湊町三丁目C街区地区市街地再開発組合設立総会
4.24	第2回街なか再生サポーター会議
5.3	第3回街なか再生サポーター会議
6.02	道後温泉活性化懇談会
6.27	第4回街なか再生サポーター会議
7.07	道後ホテル建て替えデザイン協議
7.10	第1回道後温泉観光会館再整備検討委員会
7.18	道後温泉周辺ファサード整備協定運営委員会
7.21	第5回街なか再生サポーター会議
7.28	第6回松山駅周辺笑顔あふれるまちづくり推進協議会
08.22-23	平成29年度中心市街地まちづくり研究会（松山、小野活動報告「松山アーバンデザインセンターによる公民学連携のまちづくり」）
8.23	第2回道後温泉観光会館再整備検討委員会
8.24	道後ホテル建て替えデザイン協議
8.28	第6回街なか再生サポーター会議
9.04	道後温泉周辺ファサード整備協定運営委員会
9.11	第1回松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会（尾崎講演「街のデザインが、街の価値を高める」）
9.13	APS推進会議都市+デザインフォーラム（東京、尾崎講演「公共空間の戦略的・統合的デザインの実現に向けた体制と職能に関する考察」）
9.19	第3回道後温泉観光会館再整備検討委員会
9.26	第7回街なか再生サポーター会議
9.27	第2回松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会
10.01	「移動する建築」都市設計コンペ応募締切
10.07	「移動する建築」都市設計コンペ一次審査
10.08	「みんなのひみつ基地」アイデア募集応募締切
10.11	第9回アーバンデザイン研究会「魅力ある都市のかたちとは」
10.14	「みんなのひみつ基地」アイデア募集一次審査
10.18	道後温泉周辺ファサード整備協定運営委員会
10.27	ライブトーク「建築と交通は都市をー今松山から考えるー」
10.28	「移動する建築」都市設計コンペ、「みんなのヒミツ基地」アイデア募集二次審査会
10.31	第7回三津浜地区景観まちづくり勉強会
11.07	「移動する建築」デザイン協議（南雲勝志氏およびデザイナーと）
11.11	ソトノバアワード二次審査会
11.13	第3回松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会
11.14	第10回都市再生協議会
11.15	第8回松山市中心市街地賑わい再生社会実験専門部会
11.17	第4回道後温泉観光会館再整備検討委員会
11.19	「移動する建築」デザインワークショップ
11.22	第10回アーバンデザイン研究会「新しい第三セクターをつくる」
12.17	「移動する建築」製作ワークショップ
12.20	第4回松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会
1.15	第5回道後温泉観光会館再整備検討委員会
1.29	第5回松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会
2.04	「移動する建築」製作ワークショップ
2.2	第8回三津浜地区景観まちづくり勉強会
3.18	「移動する建築」お披露目会
3.18	UDCMフォーラム「松山からデザインする」
3.31	道後温泉周辺ファサード整備協定運営委員会

学ぶ	
5.12	松山アーバンデザインスクール (3期、事前説明会)
5.19	松山アーバンデザインスクール (3期、第1回)
5.26	東温アーバンデザインスクール (2期、第1回)
5.27	松山アーバンデザインスクール (3期、第2回)
6.02	松山アーバンデザインスクール (3期、第3回)
6.08	東温アーバンデザインスクール (2期、第2回)
6.09	松山アーバンデザインスクール (3期、第4回)
6.16	松山アーバンデザインスクール (3期、第5回)
6.29	東温アーバンデザインスクール (2期、第3回)
6.3	松山アーバンデザインスクール (3期、第6回)
6.3	松山3期生かやまちクラブ夜市へ参加
7.06	東温アーバンデザインスクール (2期、第4回)
7.14	松山アーバンデザインスクール (3期、第7回)
7.24	松山3期生かやまちクラブ天神祭りへ出展
7.27	東温アーバンデザインスクール (2期、第5回)
7.28	松山アーバンデザインスクール (3期、第8回)
8.04	松山アーバンデザインスクール (3期、第9回)
8.09	松山3期生伊予絆班伊予絆会館へ視察
8.24	東温アーバンデザインスクール (2期、第6回)
9.14	砥部アーバンデザインスクール (1期、第1回)
9.22	松山アーバンデザインスクール (3期、第10回 (中間報告会))
9.28	東温アーバンデザインスクール (2期、第7回)
10.01	砥部アーバンデザインスクール (1期、第2回)
10.06	松山アーバンデザインスクール (3期、第11回)
10.12	砥部アーバンデザインスクール (1期、第3回)
10.19	砥部アーバンデザインスクール (1期、第4回)
10.2	松山アーバンデザインスクール (3期、第12回)
10.21	東温2期生東温市井内地区「棚田の新米まつり」へ出店
10.26	砥部アーバンデザインスクール (1期、第5回)
10.27	松山アーバンデザインスクール (3期、第13回)
11.09	東温アーバンデザインスクール (2期、第8回)
11.09	砥部アーバンデザインスクール (1期、第6回)
11.1	東温2期生大街道「第6回高齢者まつり」へ出店
11.1	松山アーバンデザインスクール (3期、第14回)
11.16	砥部アーバンデザインスクール (1期、第7回)
11.17	松山アーバンデザインスクール (3期、第15回)
11.18	松山3期生かやまちクラブ「第1回かやまちクラブ」
11.19	松山3期生 NEXUS お城下マルシェへ出店
11.19	松山3期生公園まちづくり@松山「城山ピクニック」
12.01	松山アーバンデザインスクール (3期、第16回)
12.02	松山3期生まつトラムラリー
12.02-03	松山3期生伊予絆班ハンドメイドアクセサリー体験ワークショップ
12.07	東温アーバンデザインスクール (2期、第9回)
12.07	砥部アーバンデザインスクール (1期、第8回)
12.1	松山3期生 NEXUS みんなのひろばにて出店
12.15	松山アーバンデザインスクール (3期、第17回)
12.16	松山アーバンデザインスクール (3期)、東温アーバンデザインスクール (2期)、砥部アーバンデザインスクール (2期) 活動報告会
1.14	松山3期生まつトラムラリー「路面電車サミット」にて活動報告
1.16	松山3期生まつトラムラリー婚活イベント
1.27	松山3期生まつトラムラリー婚活イベント
2.15	砥部アーバンデザインスクール (1期、第9回)
3.01	松山3期生休日ブランナーズ「MUST」刊行
3.06	砥部アーバンデザインスクール (1期、第10回)
3.08	東温アーバンデザインスクール (2期、第10回)
3.1	松山3期生公園まちづくり@松山「風あげまつり@城山公園」
3.25	松山3期生公園まちづくり@松山が提案し、城山公園内の the Park M's Coffee にてピクニックグッズのレンタルサービス開始

交わる	
4.14	産経新聞ミュージアムカフェ
4.16	お城下マルシェ
4.19	ハッピー絵本ライブ
4.22	星空散歩
5.01-10.31	ヘチマのグリーンカーテン
5.1	ハッピー絵本ライブ
5.21	お城下マルシェ
5.22	もぶるんるん♪オトナのダイエット
5.24	大人の絵本講座
6.04	もぶるんるん♪オトナのダイエット
6.07	ハッピー絵本ライブ
6.11	もぶるんるん♪オトナのダイエット
6.15	モバイル屋台「もぶるドリンク開発ワークショップ」
6.18	お城下マルシェ
6.21	大人の絵本講座
6.24	MOBURU LIVE STUDIO・夏だ！海だ！あ、噴水だ！
6.25	もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.01	星空散歩・モバイル屋台「土曜夜市」出店
7.01	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
7.02	たけちゃんの Art Craft 教室
7.07	産経新聞ミュージアムカフェ
7.08	モバイル屋台「土曜夜市」出店・たけちゃんの ArtCraft 教室
7.09	MOBURU LIVE STUDIO
7.12	ハッピー絵本ライブ
7.15	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.16	星空散歩・もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.22	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.23	夏の宿題お助け隊
7.25	もぶるんるん♪オトナのダイエット
7.26	夏の宿題お助け隊・大人の絵本講座
7.29	モバイル屋台プロジェクト「土曜夜市」出店
7.31	夏の宿題お助け隊
8.01	道後村まつり「椿のおもてなしプロジェクト」
8.02	夏の宿題お助け隊
8.05	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2・星空散歩
8.06	夏の宿題お助け隊
8.09	夏の宿題お助け隊・ハッピー絵本ライブ
8.12	もぶる鉄道部「しこくれっしゃ大集合！」
8.13	夏の宿題お助け隊
8.19-20	夏だ！海だ！あ、噴水だ！
8.21	今むかしまちなか地図めぐり
8.23—	本から学ぶまつやま
8.23	大人の絵本講座
8.24	夏だ！海だ！あ、噴水だ！
9.01—	マドンナからの手紙
9.02	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
9.06	ハッピー絵本ライブ
9.27	大人の絵本講座
9.29	産経新聞ミュージアムカフェ
10.11	ハッピー絵本ライブ
10.14	週末はまちなかで子育てをまなぶ vol.2
10.25	大人の絵本講座
10.28-29	チェキと、仮装と、こんですと
11.05	もぶるんるん♪大人のボディメイク
11.08	ハッピー絵本ライブ
11.15	大人の絵本講座
11.23	くつしたまいれ
11.24	星空散歩
11.26	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.02	星空散歩×もぶる工作教室
12.06	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.13	ハッピー絵本ライブ
12.14	大人の絵本講座
12.16-25	まちなかてくてくクリスマス
12.20	もぶるんるん♪大人のボディメイク
12.24	もぶるクリスマス・もぶる鉄道部「しこくれっしゃ大集合！」
12.24	モバイル屋台プロジェクト「MOBURU CHRISTMAS」
1.10	ハッピー絵本ライブ
1.12	産経新聞ミュージアムカフェ
1.14	もぶるんるん♪大人のボディメイク
1.26	大人の絵本講座
1.28	もぶるんるん♪大人のボディメイク・いい椿の日イベント
2.05	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.11	もぶるんるん♪大人のボディメイク
2.14	ハッピー絵本ライブ
2.19	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.25	もぶるんるん♪大人のボディメイク
2.26	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
2.28	大人の絵本講座
3.04	もぶるんるん♪大人のボディメイク
3.05	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
3.14	ハッピー絵本ライブ
3.18	お城下マルシェ
3.19	スマホで動画編集 Workshop ～地域の魅力や活動の発信に～
3.24,27,30,31	まちのがっこう

知る	
4.05	第104回「まち@ラヂ」放送
4.12	第105回「まち@ラヂ」放送
4.18	編集ワークショップ
4.19	第106回「まち@ラヂ」放送
4.26	第107回「まち@ラヂ」放送
5.03	第108回「まち@ラヂ」放送
5.09	編集ワークショップ
5.10	第109回「まち@ラヂ」放送
5.17	第110回「まち@ラヂ」放送
5.23	編集ワークショップ
5.24	第111回「まち@ラヂ」放送
5.31	第112回「まち@ラヂ」放送
6.06	編集ワークショップ
6.07	第113回「まち@ラヂ」放送
6.14	第114回「まち@ラヂ」放送
6.20	編集ワークショップ
6.20	もぶるマガジン vol.4 刊行
6.21	第115回「まち@ラヂ」放送
6.28	第116回「まち@ラヂ」放送
7.04	編集ワークショップ
7.05	第117回「まち@ラヂ」放送
7.12	第118回「まち@ラヂ」放送
7.18	編集ワークショップ
7.19	第119回「まち@ラヂ」放送
7.26	第120回「まち@ラヂ」放送
8.01	編集ワークショップ
8.02	第121回「まち@ラヂ」放送
8.09	第122回「まち@ラヂ」放送
8.16	第123回「まち@ラヂ」放送
8.22	編集ワークショップ
8.23	第124回「まち@ラヂ」放送
8.30	第125回「まち@ラヂ」放送
9.06	第126回「まち@ラヂ」放送
9.13	第127回「まち@ラヂ」放送
9.19	編集ワークショップ
9.20	第128回「まち@ラヂ」放送
9.20	もぶるマガジン vol.5 刊行
9.27	第129回「まち@ラヂ」放送
10.03	編集ワークショップ
10.04	第130回「まち@ラヂ」放送
10.11	第131回「まち@ラヂ」放送
10.16	編集ワークショップ
10.18	第132回「まち@ラヂ」放送
10.25	第133回「まち@ラヂ」放送
11.01	第134回「まち@ラヂ」放送
11.07	編集ワークショップ
11.08	第135回「まち@ラヂ」放送
11.15	第136回「まち@ラヂ」放送
11.21	編集ワークショップ
11.22	第137回「まち@ラヂ」放送
11.29	第138回「まち@ラヂ」放送
12.06	第139回「まち@ラヂ」放送
12.13	第140回「まち@ラヂ」放送
12.19	編集ワークショップ
12.2	第141回「まち@ラヂ」放送
12.25	もぶるマガジン vol.6 刊行
12.27	第142回「まち@ラヂ」放送
1.10	第143回「まち@ラヂ」放送
1.16	編集ワークショップ
1.17	第144回「まち@ラヂ」放送
1.24	第145回「まち@ラヂ」放送
1.30	編集ワークショップ
1.31	第146回「まち@ラヂ」放送
2.01	もぶるマガジン、愛媛県知事取材
2.14	第147回「まち@ラヂ」放送
2.15	編集ワークショップ
2.20	「まち@ラヂ」FM 愛媛勉強会
2.21	第148回「まち@ラヂ」放送
2.28	第149回「まち@ラヂ」放送
3.14	第150回「まち@ラヂ」放送
3.20	もぶるマガジン vol.7 刊行
3.21	第151回「まち@ラヂ」放送
3.22	編集ワークショップ
3.28	第152回「まち@ラヂ」放送



松山アーバンデザインセンター

〒 790-0012 愛媛県松山市湊町 3 丁目 7 番地 12

TEL 089-968-2921

E-MAIL udcm.matsuyama@gmail.com

HP <http://udcm.jp>

FACEBOOK <http://www.facebook.com/UDCMatsuyama/>

TWITTER <http://twitter.com/UDCMatsuyama>